

闇と松原との中を汽車は猶ほ走つた。

窓を透して見ると、外は水らしく、星の映つてゐるのがチラチラと見えた。あたりはひろびろとしてゐた。

『邑智潟の岸を通つてゐるんですか？』かう私は傍にゐる村の青年らしい男に訊いた。

『さうです？』

『ちや、もう七尾もちきですな？』

『さうです……』かうその青年は言つたが、『何方へ行らつしやるんです？』

『和倉へ行かうと思ふんですが？』

かう言つたが、ふと思ひついて、『自動車はありませうか？』

『乗合ですね？ さア……。あるにはあるんですがな。何臺もないんですからな……。二臺し

かないんですから。餘程早く乗らないと、すぐ満員になつて了ひますよ』

『そいつは困つたな』

『馬車はありますか？』

『さア、夜は何うですが。晝なら無論あるんですけども……』かう言つたが、その青年は私の方を見て、『だから、駕方がないから、この汽車を下りたら、すぐ飛んで行くんですよ。そしていさなり、自動車のある方などには目を呉れずに、向うの旅舎に行つて、切符を買つちやうんです？ さうすれば大丈夫ですよ。二臺は行くですから』

『その旅舎の名は？』

『なアに、すぐ前の宿屋でさ。そこに自動車が出張してゐるわけなんですから』

『難有う！』

私はかう呉々も禮を言つた。

實際、七尾ではこの青年の注意に感謝しなければならなかつた。もしその青年が注意して呉れなかつたならば、普通に汽車を下りて、普通に切符をわたして、そして普通にその自動車のあるところへなど行つてゐたならば、私はとてもその二臺しかない自動車などには乗ることが出来ず

に、寒い寒い俵に二時間も戦へるか、でなければ、あたゝかい温泉宿の一夜の代りに、七尾のわびしい寒い旅舎を我慢しなければならなかつたのであつた。

二十一

和倉の朝は雨だつた。静かな、冷めたい、あたりが茫と曇つてゐるやうな雨だつた。

私はこれが和倉かと思つた。こんな狭い感じのするところではなかつた筈だ。海がひろく見える筈だ。もつと明るい晴々としたところの筈だ。海にももつと澤山舟があつて、帆などが絶えず見えてゐる筈だ……。昨夜、自動車で別なところへ伴つて來られたやうな氣がした。

しかし次第に和倉だといふことがわかつて來た。この前來た時には、七尾のもう一つ先きの停車場まで行つて、そこから汽船でやつて來たので——夏で明るい晴れやかな海であつたので、それでさう思はれたので、町の通りや、埠頭や、入江や、さういふものにも次第に見覚えがあるやうになつて來た。それにしても、夏と冬とは、晴れた日と雨の日とは、かうも感じが違ふものかと思はれた。

『丸で別なところかと思つた』
かう番頭に言ふと、

『それは、もう、お話になりませんよ。冬は——。これも、もう少し経ちますと、賑やかになつて来ますけれど……』

番頭は採手をした。

『春かね？ 矢張、一番賑やかなのは——？』

『春も賑かですが、何と言つても、夏場ですな、此處は？ 海水浴も出来ますからな……』

『さうだね。夏だね、此處は？ 此前に来た時には、こんな暗いさびしいところとは思はなかつた——』

私の眼の前には、明るい碧い海があつた。帆は常に往つたり来つたりした。ペンキ塗の汽船も行つたり来つたりした。波の上には、游泳の人達が浮んだり沈んだりして、赤い、青い、白い旗がそこ此處に立てられてあつた。ボートも到るところに浮んでゐるのが見えた。

私は硝子戸の傍にある安樂椅子に身を寄せて、じつとそのさびしい冬の海を眺めた。あれが、あの向うに見えてゐるのが、あれが能登島だらうか。その向うにあの海門のやうな小口瀬戸があるのであらうか。そしてこの前に来た時には、そこから宇出津、小木の方へ出て行つたのであらうか。かう思ふと、私は不思議な氣がした。長い年月が曾てはつきりとつかんだ印象をも全く異つたものにしてつたやうな心持がした。

外には静かに冬の雨が降つてゐた。能登島の山槽には雲がかゝつて、時にはかくれ、また時には現はれたりした。非常にとほいとほいとほいのやうにも思はれた。海には一帆の影すらもなかつた。

しかも何處かで艶めかしい氣勢はしなないでもなかつた。昨夜も、寢てから、下の座敷で三味線の音がして、微かに女の笑ふ聲がしてゐた。今朝はまた今朝で、大きな綺麗な風呂場に入つて行くくと、誰もるはすまいと思つた浴槽の中に、美しい女が白く透き徹るやうな肌と漆のやうな黒い髪とを見せて、向うむきになつてじつと湯の中に浸つてゐた。私も黙つて下りて行つて、それと

は違つた方の隅のところに身を沈めた。で、始めは別に口もきかず、互たがひに背中せなか合あになつてゐたが、やがて女おんなは浴槽ゆきから出て、流ながして頻しばしばりに體からだを洗あらひながら、「此方こちらも矢張やはりお寒さむう御座ございますね？」などと言いつて話わし出した。二十七なな八はちの、美うつくしい、何方どつから見みても、その道みちの女おんなとしか思おもはれないやうな女おんなであつた。

段々だんぜん聞いてゐると、東京とうきやう言葉ことばなので、

『失禮しつれいですけども、貴方あなたは東京とうきやうですか？』

『いゝえ』

女おんなは笑わらつた。

『でも、言葉ことばが東京とうきやうのやうですから——』

『さうですか。さう聞きえますか？』笑わらつたまゝ女おんなは頻しばしばりに手てや足あしを洗あひ續つけた。暫しばくしてから、

『さう言いへば、東京とうきやうにゐたことはあります……』

『——でせう？ 何どうも、さうだと思おもつた。さうでなくつては、あゝいふ調子ていしは出でませんからね……。それに、東京とうきやうにもかなり長ながくお出いででしたらう？ 一年いちねんや二年にねんではありませぬね？』

『よくおわかりになりますね？』女おんなは笑わらつて、『十年じゅうねんほどゐましたの？』

『さうでせう。十年じゅうねんゐれば、まア、東京とうきやう言葉ことばになつて了しまりますからな……。何處どこにゐらつしやいました？』

『水天宮すいてんぐうさまの近所きんじよにゐましたの？』

『さうですか……。それぢや東京とうきやうの眞中まんなかだ』よし町ちやうの藝者げいしやであつたことがすぐわかつた。暫しばく沈黙ちんもくしたあとで、

『金澤かなざはですか？』

『私わたし？ いゝえ……』

『ぢや、何處どこから？』

『今いまですか？』

かう言つて笑つて、『七尾にゐますの……。生れが此方の方のもんですから、何うしても此方が戀ひしいんですね。三年前に歸つて來ましたの』

『さうですか？ 七尾ですか。あそこは好い處ですね？』

『東京なんかよりも、田舎ですから、何うしてもものんきですね。東京は面白いには面白いけども、命が縮まるやうな氣がしますもの……』

『何うしてもさうですね』

それからそれへといろいろと話をしたことを私は繰返した。七尾の花柳界の話などを後には持ち出したことを私はくり返した。その女は今では棲を取つてはゐないかも知れないけれども、自分の名で藝者屋をやつてゐて、抱妓も一人二人はゐらしかつた。旦那と二三日前から湯治に來てゐるらしかつた。

私は深く温泉氣分に浸つたやうな氣がした。さびしい中に艶めかしい氣分——それが東京の氣分として一番すぐれた情趣であることを思つた。外では雨が瀧瀧をなして降つてゐる……。一片

二片雪も交つてゐる……。海は茫として半ば白く半ば灰色にひろく遠くひろけられて見えてゐる……。

私はこの前來た時、七尾から小木の方に行つたことを思ひ出した。汽車から下りると、すぐそこに汽船が出帆するばかりに褐色の烟を擧げてゐるので、晝飯も食はずにすぐ飛乗つた。あの時分はまだ若かつたと私は思つた。旅から旅へと平氣で歩いた。晝飯一度食はずにゐることぐらゐ何とも思つてゐなかつた。で、私は半日餓を抱えて、小口瀬戸から能登の東海岸の方へと出て行つた。今でもその時のさまがはつきりと眼に映つて見えるやうな氣がする。あのひろひろとした海、その向うに見えてゐる能登半島、半は丘陵を成してゐる高原の上にところどころに高く燃え上つてゐる焚火の烟、徒崖の中に人知れずかくされてあるやうな宇出津の港、小木の港、赤くはけた崖に生えてゐる褐色の松、鯖釣りに何隻となく揃つて出かけて行く船、小木の港を一面に埋めるやうに入つて來てゐる船、その上にある二階づくりの旅舎、その旅舎の欄干から遙かに指さされる立山の連峰、九十九灣の靜かな海、それからずつと飯田から珠洲の鼻まで——それを思ふ

と、あの海のどよみがはつきりその前にあらはれて来るやうな気がした。

私は珠洲の鼻までは行つて見たけれども、あの北の果ての輪島へはまだ行つて見たことがなかつた。私はその時珠洲の鼻からそのまゝそこに廻らうとしたが、その海岸は非常に路がわるく、そこに行くよりも、一度和倉まで汽船で引返して、そこから馬車なり車なりで行く方が好いといふので、そのまゝ此方へと戻つて来たが——和倉まで来たが、矢張何の彼のと都合が出来て、たうとうそこに行くことが出来なかつた。

『惜しいことをしたよ』

かう私は何遍も人に話した。

『なアに、あんなところに行くのはわけはありませんけども、行つて見たところで大したことはありませんよ。十年ほど前にすつかり火事で焼けて、町はひどくなつた筈ですが、その後恢復しましたが何うか。さうですな。和倉から向うは丸で山と丘の中の田舎道です。何にも見るものはありやしません。海だつて、ちよつと見える位のもです』輪島に行つたことがあるといふそ

の地方の人は、こんなことを言つた。

『でも、峠があるでせう？ あの時からすつと北の海に向つて下りて行く感じは好きさうぢやありませんか？』

『大したことはありませんよ』

『海は見えるでせう？』

『見えるには見えます？』

『暗澹とした北の海！』と言つた感じがするだらうと思ふんだが——』

『想像して置く方が好いでせう？ 屹度？』かう言つてその人は笑つた。

今それがまた思ひ出された。その欄干の安樂椅子で。さびしい海と冷めたい雨とを前にして……。

『近畿の温泉——成るほどさう澤山はありませんな。まア、一番温泉らしいのは有馬でせうかな』

『有馬？ まア、さうでせうな。衰へた、俗化したところですけども、あれでも歴史にも名高い温泉ですから……。秀吉が淀君を伴れて入湯したり何かしてゐるんですから？ しかしその時分は、湯なんかも、もつと多かつたんでせうな？』

『しかし、それでも、あそこからは、また俗化したと言つても、さうひどく俗化した方ではありませんよ。六甲あたりに登れば、景色は好し、夏は涼しい、世離れてはゐるし、それに生瀬の方へ出て来る川に沿つた路なんか好いちやありませんか？』

『さうですね、わるくはありませんね。しかし、有馬一つで、近畿を代表させるのはさびしい

ですわ？」

『だから、上方の人達に取つては、北國の温泉がありますよ。それに別府がありますよ。くれる丸に乗れば、あそこまではわけではないですから……。此頃では、上方の人達は湯治と言ふと、皆なあそこまで出て行きますよ』

『さうでせうな。別府まで行けば、たしかに温泉気分になれますから……。しかし、有馬の他に、もつとありませんかな？ 近畿に？』

『城の崎は何うです？』

『あ、あれも今では京阪の人達のためにある温泉になりました……。大社線で行けば、京都から四時間と少しで行けますな……。あそこも好い……。しかし湯は矢張り多いとは言へません。それに、あたりの景色だつて、平凡ぢやありませんか？』

『平凡は平凡ですな』

『とても、關東の伊香保とか、箱根とかいふわけには行きませんな』

『寶塚は？』

『あそこは俗地だ。温泉場と言ふよりは、東京で言へば、淺草公園と言ふたやうな氣のするところだ……。』

『それはさうですな』

『それに、あゝいふところは、上方の人達に向くと見えて、生駒にもあゝいふところが出来たとか出来るとか言ふぢやありませんか？』

『あれは湯や演藝よりも、女買ひの方ですよ。』

『さうですか。女ですか？……その他に、嵐山の奥の温泉、六甲の下のところにある温泉、それから苦楽莊と言つたか何んと言つたか、ちよつと眺望の好いところがあるにはありますね。しかし、皆なつれ込めを目的にしてゐるやうな旅舎ですね。湯はついたりですね……。それに、上方では温泉場を温泉場らしくせず、唯、湯があるといふ設備だけしかしてゐないやうなところがある。神戸の諏訪山の温泉などもその一つですわ？』

『だって、あそこだつて、湯の量が少ないんですもの……。あれより發展の路はありませんよ』
『さうですか……。それから、吉野の方に行くところに、葛といふところがあつて、温泉が
ありますね？』

『あれはわかしの湯です……。それに下等です。とても温泉などと言へるものではありません』

『さうですかね……。かう數へて来て見ると、ねつからありません……。まア、そんなもん
ですかね？』

『大和の奥か、紀州かに入れば、また随分あります』

『紀州では龍神ですか。それから鉛山ですか？ もつと奥では、熊野の本宮の近くに、湯の峰
温泉がありますね。それから勝浦の近所にもありますね……。しかし、皆な遠い。それに、交通
が不便だ。そんな方に行くよりも北國とが、別府とかに行く方が行き易い……。』

『それはさうです』

『従つて設備がわるいのにきまつてゐる。とても都の人達の入れるやうな温泉ではないのにき

とても都の人達の入れるやうな温泉ではないのにきまつてゐる……。それから、大和の奥に入る
といふ字と波といふ字を書いて、何とかなまつてよませる温泉がありますな？』

『入といふ字に波といふ字？ そんな温泉がありましたかな？ 何處ですツて、吉野の奥です
ツて？』

『何でも吉野川の上流の方だと覚えてゐますがね？』

『あ、わかつた、わかつた——しほのは温泉！』

『あ、しほのは！ さうだ、さうだ。おもしろい不思議な読み方をさせると思つてゐた。あそ
こは好い温泉なんでせう？』

『でも、あんな山の中？ とても駄目ですな。京や大阪の人達はあんなところには行きません
な……。あそこよりは、まだ鉛山なんかの方が行き好い？ 鉛山なら、大阪商船のあの熱田通ひ
の汽船に乗る勇氣さへあれば、半日と少ししか、れば行けるんですから……。』

『しかし、あのしほのは温泉は、山の温泉として、ちよつと面白さうぢやありませんか。溪流

のすぐれた眺めなどがあるさうだが——』

『それは吉野川の上流だから、ちつとは景色の好いところもあるでせうけども、何しろ、上市から十里も山の中ですからな……。それに、材木商人に荒されてゐますからな……。とても静かといふわけには行きませんよ』

『でも、俵が通ふには通ふさうですね？』

『俵が通つたつて、山路ですからな。あんまり楽でもありませんよ』

こんな話はそれからそれへと長く續いた。

二十三

吉野に温泉があつたら——そしたら、箱根以上のすぐれた賑かさを持つたであらう。否それは温泉がなくとも、單に山としても、遊覽の客は常に絶えないやうなところであつたけれども……。

後醍醐天皇が吉水院に於て詠まれた御歌の中に、花にねてよしやよしののよし水の枕の下に石はしる音といふのがあるが、その石走る音は今でもはつきりと旅客の寢覺の枕のもとにきこえて來るが、その谷底に鑛泉が出て、それをわかつて浴客の來るのを待つてゐるといふことであつた。しかしいかにしても設備が十分でなかつた。唯、一軒の浴舎と小さな浴槽とがある許りであつた。

しかし吉野は好かつた。近畿地方では、山としては先づ先づ吉野にとゞめをさなければならなかつた。京都附近にも貴船とか、鞍馬とか、大原とか、高雄とか、好いところがあるにはあるけれども、その深さに於て、嵐氣の饒さに於て、とても此、彼に及ぶべくもなかつた。宇治も好

い、奈良も中々好い、——しかし更に更に吉野は好かつた。

私はこの初冬に奈良から吉野へと旅行した。従つてその印象は今だにはつきりと頭に残つてゐた。奈良では、薬師寺のある西の京で半日を暮らした。落葉のガサガサと散る田圃道に夕日が斜にさしわたつたさまは何とも言はれなかつた。唐招提寺の疎らな林の中には、殊に色の濃い紅葉があつて、遠い遠い昔のことが脈々として私の胸に迫つて来た。

奈良で一泊した。それは丁度猿澤池の畔で、小さなせゝらぎがすぐ下にきこえるといふやうな旅舎の一室であつた。月は明るく池を照した。鹿の聲が玲瓏として笛のやうにあたりに響いてきこえた。

あくる日は、朝早く石上神宮に行つた。つゞいて三輪に行つた。そこでは古い土佐派の繪畫の故郷に來たやうな氣がした。緑色の濃やかな杉に染めたやうな紅葉の添つてゐるのも繪を見るやうな氣がした。長谷の觀音の舞臺から見下した紅葉もわすれかねた。

それから私は飛鳥に行つた。岡寺に行つた。壺阪に行つた。高取のあの古い町をも通つて見た。

そして最後に吉野口から汽車に乗つて下市に行つた。あの六田の渡であつたところに、大きな鐵橋がかゝつてゐるのなども、久しくやつて來なかつた私の眼を敬たせた。

そこから私は車でのほつた。いかにもあたりがさびしくつて好かつた。竹藪の蔭に水車が廻つてゐたり、疎らな林に微かに夕日がさし残つてゐたり、ほのぐらい杉の下道に目のさめるやうな紅葉がくつきりと鮮かに見えてゐたりした。折れ曲つた道は、一町目毎に立てられてある石標について更に曲つて、谷を前に展いたり、絶壁を敬た、せたりした。深い大きな谷があらはれて來た。

山の脊のやうなところにある吉野町——表が一階で裏は三階にも四階にもなつてゐるやうな町、冬は山からおろして來る風が寒いので、全く裏の方の戸は閉め切つて置くといふやうな町、その町のところどころに、例の藏王堂があり、金剛峰寺址があり、吉水院があり、竹林院があり、勝手明神社があり、更に谷を越して向うに塔尾の山陵と如意輪寺とがあるのであつた。南朝五十年の悲しいあとは、歴々とそこに残されてあるのであつた。

私は夜おそく旅舎について、わざ／＼わかして呉れたらしい古風な五右衛門風呂に入つて、ひとり静かに自分の姿をその深い谷に臨んだ欄干に見出した時には、何と言つて見て好いかわらないやうな気がした。私は頭のキイと緊めらるゝやうなを感じた。戸外には薄月があつて、それか向うの山、更にその向うに敵つた城壁のやうな山に微かにさし添つてゐるのを私は目にした。否、そればかりではなかつた。その深い谷の底にはその小さやかな溪流の石に咽ふ響が、微かに微かに、心をそつちに誘はずに置かないほど微かに傳へられてゐるのを聞いた。

『好いな！ 何とも言はれないな！』私はじつとひとり立盡した。

二十四

前にも言つたやうに、紀州にはかなり温泉がある。それに、風景にもすぐれたところがある。近畿地方にはめづらしいと思はれるやうな深い山もあれば、荒い海もある。怒濤もある。深潭もある。奇岩もある。しかし、いかにしても交通が不便なので、旅行好きの人達も減多にそこまでは入つて行かなかつた。

今では和歌山から田邊まで自動車が行くであらうし、それから先きも俵はあるところまで通ふのであるから、一奮發すれば、ひどいと言つたところで、さう大してひどいとも思はれない。まして船に弱くなく、大阪商船の汽船に乗ることを何とも思はない人達は、那智山にも、新宮にも、勝浦にも、鉛山にもわけなく行くことが出来た。

海では潮岬あたりの眺めが最も雄大であつた。怒濤——すざましい怒濤、まごまごすれば、甲

板の上までザアと洗はれて了ふやうな怒濤、それがいつも天を呑むやうにした。それを幸うじて免れて、串本なり、勝浦なりに着いた時には、人達は皆なほつと呼吸を吐いた。「これだから、紀州には容易に入つて来られないよ。命がけだからね」やつと眩惑と心配と船酔いから免れた旅客達は、こんなことを言つて互ひに顔を見合せた。

近畿地方から紀州に入つて来て、先づ第一に目に着くのは、あたりの色彩の非常に濃やかであることであつた。杉の葉の色でも、密柑の葉の色でも、すべて非常に緑が深かつた。それに水蒸気の多い爲めか、空気が常に重くしとしとしてゐて、そして影が厚く且つ深かつた。晴れた日には、殊にその光線が鮮やかであつた。何の事はない、天城を越して、北から南伊豆に行つたやうな感じがした。

陸路は田邊から入るものと、五條から賀名生を経て十津川に入り、それからすつと本宮へと出て行くものと二つあるが、近いのは前の方が近いが、面白のは後の方であつた。峠を越して十津川の岸に出て、それから曲りくねつた溪流に添つて下つて行く風景は、ちよつと他にも澤山はな

かつた。それに比べて、田邊からの路は、間に峠が三つまであつて、人通とても甚だ稀であつた。今では、あそこを通るものなどはなくなつて了つたであらうと思はれた。

その代り、この路を行けば、すぐに湯の峰の温泉に行くことが出来た。丘の中に埋れたやうな温泉場、それでも湯の量は多く、熱度も高く、近畿の温泉といふ感じよりは、何方かと言へば、東北の温泉といふ感じに似てゐた。好い温泉だつた。紀州の温泉の中では、一番ラスチックな静かな温泉といふことが出来た。

本宮から熊野川を下る。この間は天下の奇勝と言はれてゐる。耶馬これに及ばず、木曾谷これに及ばず、玖磨、天龍、これと相伯仲すと言はれてゐる溪谷である。五里ほど下で左に北山川を容れる。水は益々多く、溪は益々美しくなつて行く。

いかにして

種は生けんと

おもふまで

たかき高根に

花の咲くかな

見上げるばかり高いところに山櫻が咲いてゐる。白くかたまつて咲いてゐる。それから少し行くと、谷と谷との間から、一條の瀑が匹練のことく落ちてゐる。「あ、あの瀑！ 何うだ！」かうした言葉が思はず私の口から出た。

『それで、その北山川をまだ上るんですね？ 漣八町へは？』

『さう——？ 何でもその合湊製から三里位山の中に入つて行かなければいけないと思ふ……』

『路はわるいですか？』

『あんまり好くはありませんな。四瀧のわたしを渡つて、竹筒、九重などといふところを通つて行くんです……。さうですな、山の半腹のやうなところに路がついてゐて、下に深く深く北山川を見下して入つて行くやうなところですか？ この北山川といふ溪谷が幾重にも折れ曲つて行つてゐるやうな深い皮肉な谷ですからな』

『舟も通るんですか？』

『通るには通るけども、のほりは遅くつて駄目ですよ。』

『實際好いところですか？』

『漣ですか……？ さうですな、まあ好いところですか……。あれだけの深潭——碧く深く、

且長く湛えられてあるのはあまり多くはないでせう。岩石よりも潭の美ですな……』

紀州の山路のわるい話をした時には、『何しろ、地図には國道乃至縣道になつてゐながら、車が通れないやうな路なんですから……。熊野川の沿岸の路などはことにひどいですよ。猿でもなけりや通れないやうなひどい路でしたよ。それといふのも、交通の便が、すべて川に頼つてゐるからですな。歩くものなんかありません！』こんな風に私は話した。

新宮は好いところであつた。秦の徐福の墓などがあつた。海はすぐそこでありながら見えずに、四面を低い山で圍まれてゐるやうな町だつた。こゝから丘を一つ越して、西に三輪崎の港があるが、これが主として新宮への港として役立つてゐるやうであつた。このあたりは、蜜柑や夏蜜

柑が多く、到るところにその黄顆の熟してゐるのを目にした。

あの大きな那智の瀧は、まだその那智山の町に入らない中から見えた。いかにも雄大であつた。また綺麗であつた。町を通り過ぎて、杉並木の磴道にかゝつて行くと、瀧の姿は益々はつきりして来て、『はゝア、これが那智の瀧かな!』と思はせた。一步は一步毎に立留らなければならぬやうな気がした。それほどあたりはひらけて、はつきりしてゐて、そしてまたかくすところなくあらはれてゐた。そのため、いくらか山が浅く感じられるくらゐであつた。

『行きましたか? あの瀑壺のところまで——?』

かうある人から訊かれて、

『行きましたよ。しかし、あの亭のあるところから下へは、しづきがひどいんで、ずぶ濡になるつもりでなければ、とても下りて行けませんね……。でも、あそこまでは行きましたよ』

『それはえらい……。あそこから見ると、かなり大きいでせう?』

『さうですな……。大きいですな……。矢張、何と言つても、その大きさに於ては、屈指のもので

すよ』

『あれから、大雲取、小雲取をお越んになりましたか?』

『いや、あれは行きません……』

『あれを越すと、中々好いところがありますよ』

『さうですツてね……。そつちに行くといふ旅客と一緒になつて、餘程、向うに行きたかつたけれど……。さうすると、熊野川の方が見られなくなりますからね』

『では、那智山から、新宮までまた引返したわけですね?』

『さうです』

かうした話は私をその時分に伴って行かすには置かなかつた。紀州の悪灘百里——それを一口かゝつてやつと突破して、日の暮れる頃、漸く三輪崎の港の人家の見えるところへと来て、そして汽船は汽笛を鳴した。波は凄しく荒れに荒れわたる……。その中を一隻の艇が上へ下へと浮んだり沈んだりして、やつとのことで、沖の汽船へと近づいて来る。甲板の上からは荷を投げ出す。

降りる人達は毬か何ぞのやうにその小さな艇の中にころがり込む——そしてそれがすむと、汽船はすぐ凄しい煤烟をあたりには漲らせながら、シユ、シユと言つて航行し出した……。私は疲れ果て、やつと三輪崎の旅舎まで辿り着いたことを思ひ出した。その旅舎の室の裏は、すぐ海で、茫と白く暮れかゝつた中に鷗が群を成して飛んでゐたのを私は今だにはつきりと思ひ浮べることが出来た。

二十五

この頃は大社参拜が流行した。東京がらでも團體を組んで、はるばる出かけて行くものが澤山ある。春はことに多いやうだ。

この山陰線にも見るところは非常に多い。一々細かく入つて行けば、めづらしいところもかなりある。しかし、汽車でゆけば、割合に簡單だ。寄道さへしなければ、半日と少しで京都から大社まで行くことが出来た。

緩くりした旅なら、天橋立を見て宮津に一泊、その次ぎの日は、城崎に一泊といふ順序であるが、天橋立に行くのがちよつと臆眩だ……。しかし、成るべくは行つて見る方が好い。

そこに行くのには、綾部で乗換へるのであるが、京都からその綾部まで行く間が既に面白かつた。そこはいかにも山の中で、あの京都のすぐ近くにかうしたところがあるかと思はれるくらゐ

であつた。林が多く、未墾地が多く、低い山が多く、春は山躑躅などが到るところに咲いた。殿田などといふところは、ことにさびしいところであつた。綾部に近く、次第に和知川の谷があらはれて来て、段々それが大きな流になつて行くさまなども旅客の思ひを惹いた。

綾部で、尼ヶ崎を起點として南北に通してゐる阪鶴線を待ち合して、それに乗つて舞鶴へと行く。この間には停車場が一つか二つあるばかりで、すぐ行き着くことが出来た。そこからまた軌道に乗換へて海軍鶴に行く。

こゝから宮津への連絡船が出た。

この海は美しい海の一つであつた。つまり敦賀、小濱、舞鶴、津居山といふ一線につゞいた崖を持つてゐる海で、裏日本ではことに風光のすぐれたところであつた。しかしこの連絡船はかなりに動揺した。時には乗つてゐても危険に思はれるやうなことさへあつた。冬は連絡不能になることもをりをりあつた。この汽船では、舞鶴軍港の活躍した一部を右に見て行くことが出来た。また、碧い海に島嶼の點々として散在してゐるのを見て行くことも出来た。否、出て行くにつ

れて、海は潤く潤くなつて行つた。山良川の海に注いでゐるさまも、大江山の高く雲間に聳えてゐるさまも、岬と岬と相對して海を擁してゐるさまも、すべてはつきりと手に取るやうに指すことが出来た。そして次第に、天橋立の長松を右に、左に簇々とした宮津の瓦葺を目にするやうになつて行つた。

橋立の

きれ戸をわたる

苦舟に

小雨そほふる

わびしきや妹

さうした歌を私はそこで詠んだ。それは細かい糖のやうな雨の降つてゐる日であつた。山には藤や躑躅の咲いてゐる頃で、灰色をした雲が簇々と周圍の山々を包んだ。そしてその苦舟を碧い、碧い海が取巻いて、鷗が三つも四つもふわりふわり浮んでゐた。あの鷗のやうに我々も世の中を

渡つて行かなくつては駄目だね……。あのやうに静かに、落附いて、そして沈まずに——」こんなことを私は言つた。

切戸を越してから、波は静かになつて行つた。船の底はをりをり藻の上を掠めるやうにして通つて行くが、その音が、サ、サ、サと微かにきこえて、それがいかにもなつかしい、詩のやうな感じを私に誘つた。向うの山からは、雲が烟か何ぞのやうにふわふわと巻き上つた。

私は舟を橋立神社のあるところへと着けさせて、そしてそこから岸にのほつた。いかにも静かであつた。いかにも給のやうであつた。女の派手な蝙蝠傘があたりに作つて見えた。

岩見重太郎の仇討をしたといふ跡などを見て、そして再び私達は船に引戻した。幸ひにして雨は止んだ。艦の音は静かに長い松林に響きわたつた。

舟を捨てたところには、一軒の旅舎があつて、一面に藤の花が亂れ咲いてゐるのを私達は目にした。「まア、綺麗ね？」かう女は言つて立留つた。

私達はそこで藁草履を借りた。これから傘松まで十二三町ひたのほりになつてゐるといふこと

であつた。やがて路は疎らな松林の中から、お宮の境内を通つて、次第に山路へとかゝつて行つた。かなり急な勾配が私達の前にあつた。一二町行つては休み、また一二町行つては休んだ。しかし五六町行つて振返つた時には、私達は思はず聲を挙げた。

『好いな——』

縦一文字の長松——先の方に行つていくらか曲つてゐる天の橋立は、何とも言はれない媚態を私の前に見せてゐるやうな気がした。美しく、やさしく、また素直に。

『まア、何んて好いでせう』女もかう言つて立留つた。

水蒸氣の多いのが殊にその光景を深く見せた。いかにも瀟洒で、そして落付いてゐた。美しい女が、『まア遠いところをよく来て下さつた！ しかも、お二人づれで——』かう言つて迎つて呉れてゐるやうに思はれた。

傘松のあるところは、縦一文字を見るには最も好いところであつた。そこから見ると、長松のある内と外とは、海の色は著るしく違つてゐた。外の濃い碧であるのに引かへて、内はわるく

灰色になつて見えてゐた。それだけ内の方が初期の潟湖になりつゝあるのであつた。私はじつと眺め盡した。

この他、但馬街道の樗峠が、天の橋立を見るにつけしの好位置として數へられてゐた。そこからは横一文字に橋立を見ることが出来た。

宮津で一泊つて、あくる日は、連絡船が厭なら、その海岸を自動車で舞鶴までぐるりとまわつて來ることが出来た。この間にも、由良川の河口だの、伊勢神宮以前の神宮の址だの、山椒大夫のあとだのを見ることが出来た。

で、再び緩部に來る―それからまた山と山とが續いた。つまり丹波丹後から但馬に跨つた高原性山塊の中を汽車は通つて行つてゐるのであつた。それでも福知山町のあるところだけは、山がやゝひらけて、川があつたり、橋があつたり、野があつたりしたが、そこを出ると、山また山で、いかにもさびしい感じのする山村ばかりがつゞいて行つた。かうした感じは、東北地方では、とても見ることが出来ないものであつた。しかし停車場を経て行くことに、次第に溪流が大き

なり、せゝらぎが美しくその前に展開されるやうになり、猪垣があちこちに見えるやうになり、やゝひろい野を山槽の彼方に見るやうになつた。そこに豊岡の市街のある野がやつて來た。矢張り山に圍まれてゐるが、それでも夕日が長く長くさし込んで來てゐた。川が靜かに緩やかに流れてゐた。

もはや城の崎はそこからいくらもなかつた。汽車は圓山川に添つて、次第に其方へと近寄つて行つた。やがて例の玄武洞のある徒崖が川の向うに白く際立つて見え出して來た。薄暮の色は既にあたりに迫つて來てゐた。

汽車は留つた。

『きのさき、きのさき』かういふ車掌の觸れ聲は、旅客の心をせゝり動かさずには置かなかつた。そこには温泉がある。ゆつくり旅の勞れを慰めることが出来る。かういふ氣がする。で、急いで下りて、構外に客待してゐる俵に乗る。

『どちら？』 お宿は？』

『西村が好いだらう？』

かっいふ中に、俵は走り出した。最初に眼に映るのは、ところどころに空地のある、さびしい、おそろく汽車が出来たために開かれたものであらうと思はれる新開町であつたが、しかもそれもほんのわづかの間で、やがて灯が来た。賑やかな町の灯がやつて来た。

真直に突當つた。そこには小さな川があつた。橋がかゝつてゐた。しかし、それを渡らずに、川に添つて左に曲つて入つて行くと、次第に旅舎が多くなつて来た。二階、三階の大きな旅舎が――。そしてその突當つたところに、灯だの、橋だの、二階だの、混雑と巴渦を巻いてゐるのが明るくはつきりと見えた。そこに城の崎の大きな浴槽があるのであつた。

私の車は西村へと引込まれた。私はそこに大きな旅舎を發見した。私は奥の離座敷へと作れて行かれた。

しかし、道後などと同じく、此處は全く總湯式であつた。何處の旅舎にも内湯といふものはなかつた。旅客は皆な湯札を買つて、宿の下駄を穿いて、そしてその前のところにある總湯に行か

なければならなかつた。私も着物を着改へてすぐ出かけた。

橋をわたると、すぐそこが總湯であつた。戸をあけて入る――忽ち大きな立派な浴場が私の眼に映つた。大きな鏡に反射した美しい灯の光、まごまごすれば滑りさうな石張りの廣間、そこで着物を脱いで、裸になつて、戸を排して入つて行くと、あたりは一面の白い茫とした湯氣――それが次第に大きな立派な大理石の浴槽になり、浴客達の白い肌になり、ひねりさへすれば湯なり水なりがお好み次第出て来る管の連続になつた。思はずはつとそれほど浴槽は深かつた。

これは無論、道後や寶塚あたりを摸して拵へたに相違なかつたけれども、それでも新しいだけに、また金が多くかゝつてゐるだけに、規模も大きく、感じも好かつた。道後は道後でまた面白味があるけれども、その立派さに於ては、その氣持の好さに於ては、此、彼にまさること數等であることを言はなければならなかつた。

ある人の話では、この城の崎ほど中國筋にきこえた温泉はなかつたといふことであつた。昔は皆な遠くからやつて来た。はるばる中國山脈の高い山を越してやつて来た。そして一月も二月も

滞在した。従つて自炊設備などは、昔は非常に完全してゐたといふことであつた。安くるやうと思へば、いかやうにも安くることの出来るところであつたといふことであつた。播磨あたりからでも、『ひとつ、城の崎に湯治にでも行つて来るかな。』こんなことを言つては出かけて来た。今でもさうした平民的のところはあるか、何うか？

二十六

城の崎から鳥取まで来る間は、多くは山村が、でなければさびしい海のほとりであつた。トンネルも澤山あつた。香住トンネルなどは、かなり長かつたのを覚えてゐる。

『鎧といふ停車場のあるあたりは、それでもちよつと好いちやないか？』
かうある人に言はれて、

『さアね。ちよつと好いね。しがし、昔、汽車のない時分に、あそこを通つて見たが、随分ひどいところだつたね。大きな峠が三つも四つもあつてね。中々、日を重ねなければ行けないやうなところだよ。それから思ふと、今は便利になつたと思ふね』私はその時分のことを考へずにはゐられなかつた。

『それはさうでしたらうね……？ その時分はひどかつたでせうね？』

『何しろ四日も五日も車に乗らなければならぬんだから……。それに、路だつて、えらい路
でしたよ……。私はそこを通る時、かういふ歌を詠んだ……。』

『何ういふ？』

私は聲を張り上げて歌つた。

岩つゝし

山藤咲きて

あら山の

中ゆく旅も

なぐさまれつゝ

『成ほど』

『實境ですよ』

『さうでしたらうな……。しかし、その時分はその時分で、また面白いことがあつたでせうな』

『それはありましたな……。汽車で通れば、ちよつと見て行くだけだけでも、あの湖山の池な
んか半日もその岸に添つて旅行して行きましたから……。何うしても、見やうが細かいです。
賀露港などにも行つて見ましたよ。』

『鹿野町は？』

『あそこは知りません。それよりも、あの湖畔から少し此方に來たところに、湯村ツて言ひま
したかな、小さな田舎の温泉がありますよ。そこに一夜泊りましたが、ちよつと面白いところ
でした？』

『湯村？ あそこは好い。今は汽車からも、さう遠くはありませんよ。』

『少しは立派になりましたか？』

『設備ですか……。？ 設備は駄目ですな……。都會の人の氣に入るといふわけには行きますま
いな。あそこよりは、矢張東郷温泉の方が好いでせう？』

『養生館ですか？』

『さうです……。あそこも時に由つては、騒がしくつて困ることもありませんけれども、空いてゐる時は、ちよつとのんきで好いのですよ』

『さうですな……僕もあそこは好きです。何となしに、變つた氣持のするやうなところですか』

湖山の池のあの赤い松原、それに夕日がさしわたつたさまは何とも言はれなかつたことを私は思ひ起した。それに城の崎から東郷まで行く間では、例の鷲峰山の姿が旅客の眼を惹かすには置かなかつた。あのキラキラと日に光つた、巖の多い大きな山の姿！ ことに、その麓にある鹿野町、そこに残つてゐる山中幸盛の古蹟……そこには是非一度行つて見たいと私は思つた。

松崎の停車場で私は下りた。そこは平凡ではあつたが、何となしになつかしいやうな氣がした。何が私を惹いたか？ 何が私の心を惹いたか。その平遠な他の奇のない湖水か？ それともそこにわき出してゐるといふ温泉か？ それは何であつたか知れなかつたけれども、兎に角私には未だになつかしいところとして残つてゐた。

私は三面が湖水になつてゐる一室を思ひ出すことが出来た。湖を繞つた山の紅葉が美しく夕日

に榮えてゐたのを思ひ出すことが出来た。美作の生れだといふ色の白い、やさしい美しい女中を思ひ出すことが出来た。丁度それは秋の末で、あたりがしんとしてゐる。何の室にも客らしいものはゐない。手拭を持つて風呂場に入つて行くと、さきに加減を見に行つた女中が、腰をはしよつて、白い足を出して、そこに浸けてある綿布を出してゐた。

『大變なものが浸けてありまして……』女中はかう申譯をするやうに言つた。

『何だね？ それは？』

『木綿で御座います……』

『染まるのかね？』

『左様で御座います……』

丁度伊香保木綿のやうに、樺色に色がついてゐるのを私は見た。

『此處等で賣り出すのかね？』

『いえ、家で致してをりますだけで御座います』

かう言つて女中は濡れた足を拭いてあがつて行つた。

樋から落ちる湯の音が静かに静かにきこえた。それがいかにも暮れて行く秋のさびしさを私に思はせた。私はじつと深く身を沈めた。

夜、おそく月が出た。それが何とも言はず美しかった。硝子戸だけなので、カーテンを寄せると、大きな月が向うの山の上に出て、キラキラとそのすぐ下の湖水にかゝつてゐるさまが、床の中に入つてゐながらはつきりと見えた。いかにも美しかった。丸でお伽噺の中にでもあるシインのやうな気がした。

否、そればかりではなかつた。その月の影は、終夜私の室の中までさし込んで来てゐた。夜中に便所に起きた時にも、二度目に湯に入りに行つた時にも、月は明るく銀のやうにさし込んで来てゐた。

二十六

松崎から御來屋を経て米子町へと下りて行く高原——この高原も私には忘れかねた。それを思ひ出すと、私は今でも出かけて行つて見たいやうな気がした。

それは伯耆の大山の持つた高原であつた。そこには曾てラバが流れた。従つて地味もわるく、草原萱原が一面につゞいてゐるやうなところが多かつた。たとへて見れば、淺間の裾、または富士の裾と言つたやうなところであつた。唯、他に異つてゐるのは、その地盤が高く、海岸が徒崖、または絶壁を成してゐて、ところに由つては、屹立つて海に面してゐるところなどがあるために、一種言ふに言はれない爽やかな心持を感じさせることであつた。

この間——里程にしたら七里近くもあつたらうか、汽車は松崎のトンネルを出てから、この高原の海に添つた部分を真直に走つて、倉吉から赤崎、赤崎から淀江へと進んで行つた。

『美しいですな、大山は？』

『本當ですな……』

『船上山ツていふのは、何れでせう？ 御存しありませんか？』

『船上山ですか？ 名和長年の？ それならそれ！』と地方人らしい襟巻をした中年の男は指して、『さら、そこに、此方の右の肩のところに、瘤見たいにちよつと出てゐるところがありません。あれがさうです！』

『は、ア、あそこですか？ 船上山は？』

中年の男は猶ほ向うを指して、『丁度此下のところ为名和港のあつたところになります……。そこから天子さまはお上りになつて、あそこにお出でになつた。何しろ、こゝらは皆なその名和の領分だつたさうですから……』

『ぢや、隠岐も見えてせうな？』

『さア……』と言つたが、その中年の男は、今度は海の方を透すやうにして見て、『あ、見える、

見える……さら……そこに赤い雲があるでせう？ その下に、薄く、薄く、見えるか見えなかがらるに見えてゐる！ 見えるでせう？』

『あ、見える、見える。微かに、かう山のやうになつて？』

『さうです、此方で見ると、一つになつて見えるけれど、あれで二つになつてゐるんです……。高い方が島前で、左になつてゐる方が島後です……』

『遠いですな、随分——』

『海上二十里——出雲の美保の關から十八里ぐらゐりますかな……。何アに、今日は空気が加減で、少し遠く見えるんです。よく晴れてゐますと、もつとぐつと近く、はつきり見えます』

『さうすると、つまり、あそこから小舟で此處におわたりになつたわけですか？』

『さうですな……』

『いろんなことが考へられますな……。ふむ、あれが隠岐ですか？』

つて行く汽車の中では、何遍さうした會話がへり返され、何遍隠岐島が眺められ、また何遍船上山が仰がれるか知れないのであつた。海は時には灰色をしてゐることがあり、はつきりした碧を見せることがある、また、茫と霞んで、そのなつかしい島山も全くその底に沈み果て、その髣髴をさへ認めることが出来ないうなものもあつた。徒崖の下には、幅の狭い沙濱が發達して、そこに電信柱や並木松や、小さな驛などを持つた縣道が汽車のレールと並行してそのまゝ長くつづいて行つてゐた。磯では波が寄せては返し、返しては寄せた。

赤崎の停車場はよちつと私の心を惹いた。何故なら、そこにある松が美しかつたからである。松の中につゞいてゐる街道に夕日がさして、いかにも繪か何ぞのやうに見えたからである。やがて御來屋の停車場が來た。そこには、例の名和神社があり、元弘帝遺蹟と標石の立てられた御着船所があり、自分の家藏を焼いてそして決意を示したといふ名和長年の屋敷址などがあつた。

此處まで來ると、大山の美しい姿は次第に左に、左になつて、前には出雲の島根半島の脊髄を成した一帯の山脈が碧い碧い海を隔て、あざやかにあらはれ出して來た。美保の關の所在なども

それとさやかに指さされるやうになつた。

汽車の速力は急に早く早くなつた。次第にその大山の高原地を下つて、米子町へと向つて行つてゐるのであつた。大山驛では、その大山が丁度御殿場で富士でも仰いだかのやうに、かくすところなくはつきりと——はつきりすぎるほどあらはれて見えてゐた。

これから大社まで行く間には、例の中の海と宍道湖との美しい眺めがあるのであるが、汽車の窓からだけ見たのでは、何うも物足りないやうに私には思はれた。大社の参拜をさへすませれば、それで好いと言つてそのまゝ歸つて行つて了ふ人達もかなり多いやうであるが、それではあまりに惜くはなかつたか。旅客はもう少し細にこの古い出雲國を見る必要はなかつたか。少くとも松江で下りてあの美しい宍道湖を見る要はありはしなかつたか。

本當を言ふと、その湖水も船でわたつて見なければいけないのである。大社から電車で一畠薬師に行き、それから平田へ出て、汽船で松江までやつて來なければいけないのである。否、更に風景をあさつて歩く旅客ならば、杵築の海岸の稻佐濱から、舟を僦つて、その半島の西の突端口の御岬まで行つて見なければいけないのである。そして松江に來たら、そこにゆつくり落附いて、

湖に臨んだ旅舎で一夜とまる。そして都合が好かつたら、安來節でもきいて見る。勝子といふ上手な名妓がゐる筈である。そしてもし猶ほひまがあつたなら、湯村温泉に行つて見る。もとは全く田舎の温泉であつたけれども、今は大分設備がよくなつて、都會の人達でも、さう不愉快には感じない位の程度になつた。

それから美保の關には是非一度は行かなければならなかつた。何故と言ふのに、そこも好いところではあるが、そこまで行く間が——中の海の眺めが非常に美しかつたからである。宍道湖もこの中の海がなかつたなら、その好い感じの半を失つて了はなければなるまいと思ふほどそれほど美しかつたからである。で、松江の大橋の袂から出る汽船で美保の關まで行く。その間には馬潟の水郷めいた堀割があり、大根島があり、一目に見わたされた伯耆の大山があり、高山があり、更に進んで境町の瓦葺粉壁があり、潮流の急な狭い瀬戸があり、汽船の常に碇泊してゐる埠頭があり、それから次第に外海に出て、左の山の上に、例の關の五本松を見て、そのまゝ、一種の歡樂郷美保の關に入つて行くのであつた。しかし、そこまで行つても、その半島の東の突端まで出か

けて行つて見るものは滅多になかつた。私は言つた。『美保の關に行つたら、是非そこまで行つて見たまへ……。決して後悔はしはしないから……。それに、路と言つたつて、そんなに遠くはない。二十五町ぐらゐと思へばまらひはない。好いからなア、そこは？ つまり、その半島の山脈をぐつと向うに行つて見たといふ形になつてゐるんだからな？ そこに行けば、隠岐でも何でも實によく見えるよ……。日の御岬でも見えるには見えるが、それよりも一層よく見えるよ』

『そこには燈臺があるの？』

私話をきいてゐた友達はかう言つて訊ねた。

『あるんだ……。地藏岬の燈臺！ つまりここの突端と西の突端とで島根半島をくくつてゐるやうな地形になつてゐるんだからね……。その燈臺の後のところから見た海は、何とも言はれないよ』

『日の御岬と何方が好い？』

『さア、日の御岬も好いね。あそこも捨てられないね……。松が好いからな、あそこは？ し

かし、地藏岬の方には、大山がある。あそこから見た大山は何とも言はれない』

『それに、出雲には加賀のくけ戸とか何とか、非常に好い岩窟があるつていふぢやないか？
それは一體、何處なんだえ？』友達はまたかう訊いた。

『それが、その東の突端の地藏岬と西の突端の日の御岬との間にあるんだよ。そこを歩けば、
大したもんだけども……』

『君は歩いた？』

『いや……僕はまた行つて見ない。しかし、今だに、行けたら一度は行つて見たいと思つてゐる。』

『餘程あるのかね？ その間は？』

『里数にしたら、十五里か二十里だらう？ 精々……。美保の關から杵築までの里程と同じわけだね。丁度裏と表を成してゐるわけだから……。でも、そこを探るには、何うしたつて、一週間ぐるはかゝるさうだ……』

『嶮しいんだね？ 餘程——』

『その代り、好いところがあるつていふよ。海山の美を盡したつていふやうなところがあるつていふからな……』

實際、今でも私はそこに行つて見たいと思つてゐた。

大社から向うにも、見るところは澤山にあつた。石見——そこは日本でも最も遠い感じのする國々の一つであるが、今では汽車が次第に出来て、自動車をさへ利用する氣なら、そのまゝ、眞直に萩から下の關の方まで出て行くことも出来るといふことがあつた。この間もかなりに温泉があつた。三瓶山の上にある志學温泉などは、中でも殊に行つて見たいもの一つであつた。温泉津の湯もわるくはなかつた。

杵築から下の關まで、中を二晩泊る氣なら、樂に其方へと出て行くことが出来た。

大阪の埠頭から毎日出帆する丸——この汽船は四國から九州までずつと航行して行つてゐるのであるが、瀬戸内海を航行する間はさう大して海も荒くなく、潮も迅くなく、まア何方かと言へば、疊の上を行くやうな海なので、この汽船に乗つて行くものはかなりにかつた。

それに、汽船の設備が好かつた。船も綺麗だし、船室も整つてゐるし、二等で行けば、横にでも何うにでもなれて、汽車で行くよりは、ぐつと樂だつた。『あの航路なら、いくら舟に弱いものでも、減多に酔ふやうなことはありません……。樂ですな……。四國から、別府の方へ行』なら、何うしたつて、あの汽船ですよ』それに乗つたことのある人達は、皆なかう言つた。

それに、夏は涼しかつた。納涼船としても立派な價値があるなどと人々は言つた。避暑地として多くのすぐれたところを持つてゐない上方の人達に取つては、成ほどそれは好い考へであるか

も知れなかつた。それに、この汽船の通つて行くところには、風景の好いところも澤山にあるし、名勝古蹟と言はれるところもかなりにあつた。尠くとも面白い航路には相違なかつた。

このくれなる丸は、大阪を出て、あの六甲の下の海を通つて、神戸に寄つて、そこで船客を乗せて、靜かに淡路島を向うに廻つて、そして讃岐の方へ行つた。

いかにも靜かな、のんきな、落附いた気分がした。

このくれなる丸は、神戸を出てから、高松、高濱とこの二つの港に寄港するばかりで、今日の午後の二時に大阪棧橋を發するとすれば、一夜船中で過して、翌日の午後四時三十分、別府に着くやうになつてゐるのであつた。従つてあたりの風景を眺めやうとするには、やゝ物足りない感じがした。もう少しのつくり瀬戸内海を見て行きたいやうな気がした。來島瀬戸あたりまでは、全く夜で、あの美しい五劍山も小豆島も御手洗港も多度津も、寢てゐて通つて了はなければならなかつた。勿論、復航をすれば、さうしたところも見て通つて來られるわけではあつたけれど……で、もつと細かく見て行かうとするならば、汽船の設備はやゝ落ちるけれども、大阪細島線の

汽船に乗つて行くのも好いと思ふ。この汽船は到るところで寄港した。

この航路に當る瀬戸内海は、全く美しい。ところに山つては、こんなに好い景色があるかと目を睨るくらゐであつた。淡路島をべりりと廻つて、高松近く行く間は、それでもさう大してすぐれたところもなかつたけれども——鳴門の方を汽船は通つて行かなかつた——五劍山が見え出して來るあたりから次第にその特色を發揮して來た。

否、それまでも仔細に探れば、いろいろな島や港や灣や瀬戸がそれからそれへと連つてゐるのであつたが——坂越、牛窓、虫明などの港もあつたのであつたが、概して汽船は岸に寄らずに沖遠く航して行くので、さうした細かい景色を一々に見て行くことは出来なかつた。で、兒島半島を右に見て、讃岐の海に行くと、島の影が急にあたりに多く、面白い形をした山が黒く且つ碧に、やがてはあの誰が見てもすぐそれとわかる屋の形をした屋島山をその海のほとりに認めるところが出来るやうになつて行つた。

高松附近には見るところがかなりにかつた。例の栗林公園、屋島山、五劍山、神梯王墓、佐

藤繼信墓、平氏の築つた屋島御所の址、大門の址などがあつた。仔細に探つたなら、一日二日ぐらゐでは何うしてもかゝるであらうと思はれる。例の崇徳院の白峰の御陵などにも、行つて見やうと思へば、さう大して遠くはなかつた。それと反對の方では、津田松原などが美しくかつた。汽船は小豆島の北側を航行した。従つて土の庄町の白壺をそれと指すことが出来た。しかし例の神馳の奇勝もはつきりと見ることは出来なかつた。唯、奇骨稜々とした山をそれかこれかと思はるばかりであつた。くれなる丸で来れば、こゝは大抵夜だつた。

多度津——こゝあたりに来ると、島が非常に多い。しかし、四國の方に面したあたりよりも中國に向した方に、一層島の影が多い。つまり尾の道から多度津へとやつて来る航路である。御手洗港のあるあたりは、中でもことに瀬戸内海の氣分に富んでゐた。

ある人が話した。

『實際、さういふところがあるんだよ。皆な船頭相手だね。夕方、旅舎の欄干に立つてゐると、ぞろぞろさうした女が濱邊を歩いてゐる……。何うするんだと思つてゐたら、皆な舟に乗つて、

客を引きに行くんだね？』

『何んな舟だね？』

『小さな舟だよ。傳馬の少し大きいぐらゐだよ。そしてかれ等は十二時近くまで海の上にあるんだからね。そしてお座敷といふのは、船の中だからね。ちよつと變つてゐるぢやないか？』

『本當だねえ』

『それも、夏とか月のある夜とかなれば、舟の中もさう苦にはならないさうだけれど、冬の夜とか、雨の降る夜とかは、たまらんさうだ……。』

『さうだらうな』

『だから、船頭が箱屋をかねてゐるので、場合に由つては、營業主が艫を漕いで行くといふものもあるさうだ……。しかし、これの流行したのは和船時代で、今では昔の三分の一にも行かないさうだ。さうした運漕船も通らないではないが、多くは女房持で、子供などゐて、舟の中でちやんと一家を構へてゐるのが多いから、さういふ女を買ふのは、多くはそこに使はれてゐる船頭達

にすぎない。そしてさういふ船頭達は金を持つてゐない。親方に借りて遊ぶといふことになるから、親方始めその上さんもさういふ女のやつて来るのを好い顔をしない……。およしいよ、つまらないなどと言つてとめる……。何うも、今では不景氣で、一夜中、一人の客に逢はずに歸つて来なければならぬやうなことが間々あるといふことだ……。』

『つまり、昔は瀬戸内海には、さういふ遊女が澤山あつたんだね？』

『大抵はさうだつたんだね……。御手洗なんか、それでもいつまでもその風習が残つてゐる方なんだらう？ 牛窓、虫明、あそこら、皆なさうだつたんだね？』

『面白いな』

その話を聞いた私には、その港が、その夕日を帯びた白堊の港が、島と島との間の狭い瀬戸に面してゐる港が、はつきりと眼の前に浮んで来るやうな氣がした。それは、多度津から尾の道に行く間にある港であつた。

さういふ船のロオマンスは、瀬戸内海には、まだ澤山に残つてゐるだらう。時代に全く置いて

行つて了はれたやうなところもあるだらう。昔のさまがそのまゝに残つてゐて、何とも言はれない旅の思ひを惹くやうなところもあるだらう。めづらしい色彩もあるだらう。面白い船の生活もあるだらう。かう思ふと、吾々の瀬戸から御手洗港あたりまでの島や、港や、帆船や、赤ちやけた山や、ひよろ長い松などがはつきりと眼の前にあらはれて見えて来るやうな氣がした。

多度津からは、金比羅参りの人達が續々として下りた。多度津の停車場は長い町をすつと北に抜けたやうな位置にあるが、そこから金比羅まではわけなく行けた。

金比羅で驚くのは、あの長い磔道であつた。これは日本では他に何處にもないと言つて好いものだつた。行つても行つても盡きない……。もうおしまひかと思つても、また出て来る。また出て来る。しまひには、こんな長い磔道を造つた人間が馬鹿々々しくなつて来るからであつた。しかし一度は善男善女に雜つて、お参りしなければ、その馬鹿々々しさがわからないといふものである。

それに、金比羅の位置が好かつた。つまり象頭山の半腹にあるのであるが、そこから見ると、

讃岐平野が一日に見えて、あの飯野山の特立してゐるさまなど何とも言はれなかつた。それは丁度菜種の花の咲くころで、ほんやりと霞のかゝつてゐる具合など、丸で一幅の畫圖であつた。善通寺は兵營町としての他に、僧空海の故郷であるだけそれだけその遺址が非常に多い。次手に下りて見ても好いところであつた。

多度津から來島瀬戸に來ると、汽船の動搖はいくらか強くなつた。岸には灣が見えて、その上に四國では一番高いと言はれた石槌山が聳えてゐるのが見える。いかにもすぐれた眺望である。そしてその海岸の少し奥には、今治港がそれと指點せられる。脇屋義助が勤王した跡もその近所にある筈である。靜かにすうと烟の颯るのが見えた。

二十九

高松に來て汽船を下りた。

そこには興居島、伊豫小富士などといふ島嶼が散點して、いかにも海山の風光のすぐれたところであつた。私は一度宇品からそこにやつて來たことがあつた。その航路もすぐれてゐた。そこには吳の軍港があつた。音戸の瀬戸があつた。島と島とが重り合ひ、帆影と帆影とが連り合つた。音戸といふ港のあたりは、殊に感じが好かつたことを、今でも私ははつきりと覚えてゐた。

高濱で汽船を下りて、海岸を五六町左に行く。と、そこに汽車がある。停留場がある。これに乗れば、三十分ぐらゐで、松山の城の白聖を目にすることが出來た。

此處に來ると、いかにも四國に來たといふ感じがした。何となしに、あたりがやわらかであつた。靜かであつた。線に直線が少く曲線が多かつた。廣島あたりと比べると、春の來るのも早く、

桃が咲いてゐたり、菜種の花が咲いてゐたりした。三津ヶ濱の港町は、汽車の窓から遙かに見わたされた。

松山の城壁——それは尠くとも旅客の目を聳たしめるに足りた。實際美観であつた。また奇観であつた。『はア、あれが松山の城か？』誰でもかう言はずにはゐられなかつた。

今では、日本でも、完全に残つてゐる城といふものは少なくなつたであらう。私の知つてゐるところでは、此處と近江の彦根と、それからもう一つ備中の福山ぐらゐるものであらう。熊本も残つてゐるにはゐるけれども、とても此處や彦根のやうに完全に残してはゐなかつた。

そこには曲輪が残つてゐた。門が残つてゐた。天主閣が残つてゐた。いかにも封建時代のさまがそれとはつきりそこにあらはれて来るやうな氣がした。

私が始めて来た時分には、まだ汽車があつただけで、電車はなく、道後に行くにも、車に由るより他爲方がなかつたのであつたが、今は汽車からすぐ電車に乗替へて、そしてそこに行くことが出来た。

道後の温泉——古いなつかしい温泉、私が初めて行つた時には、あの大湯の前の旅舎の三階の一室に、今、向うの山から出たばかりの月がさして、樹の影や家の影や、人の影がくつきりと黒く地上に落ちてゐるが、その感じは、今だにはつきりと私の頭に残つてゐるのであつた。何うしてさういふ風に印象的に感じたかといふのに、それには理由があつた。尠くとも私は興奮してゐた。

私は廓の中にある大きな家の奥の一室の騒ぎの中からこつそりぬけ出して来たことを思ひ出した。そこには大勢女がゐて、美しい女がゐて、現にその中の一人はくじ引で自分にあてられてゐたことを思ひ出した。そして私が剛から出て来ると、その女が手水鉢のところ立つて、柄杓で私の手に水をかけて呉れたことを思ひ出した。私にはそれまでさうした知識は丸でなかつた。酒の席でさうした女を見たことはあつたにしても、さう深くまで入つて行つて見たことはこれまでも一度もなかつた。室の中では皆なは騒いでゐた。唄などを歌つてゐた。『まア、今夜はゆつくり遊ぶサ、向うにわたれば、半年はかうした面白い目に逢ひたくも逢はれないんだから……』こ

んなことを皆なは言つてゐた。私達は日露戦役に従軍するために廣島に来てゐたのであつたが、ロシアの浮屠の松山にゐるのを見るために、その朝宇品から海をわたつてやつて來たのであつた。でも私は何うしてもそこに泊りたくなかつた。何だかその女が可哀相なやうな氣がした。で、私はこつそりとそこから抜け出して來た。『まあ、貴方、遁けて行つてはいけませんよ』かう言つてあとから追ひかけて來て袖をつかまえたのを振拂つて出て來たことを思ひ出した。丁度その時、月が明るく後の山から出かゝつてゐたのであつた。そしてそれが私のゐる三階の窓にさし込んで來てゐたのであつた。

その時と比べて見ると、その次行つた時には、浴槽の設備が非常に複雑になつてゐた。二錢湯、五錢湯、十錢湯、三十錢湯などと言つて、入口が皆な違つてゐた。切符を賣るところなども出來てゐた。

初めに行つた時には、二十五錢湯と五錢湯とがあつただけのやうだつた。二十五錢出すと、三階までつれて行かれて、綺麗におつくりをした女が茶を持つて來た。何だかくすぐつたいやうな

氣がした。『これで二十五錢取られるのかな、馬鹿々々しいな』と思つた。ところが、今では五十錢になつてゐる。

この浴槽は、それほど見事ではないけれども、いろいろな湯があつて面白かつた。それに、何處か古風なところがあつた。

旅舎としては、無論、鮎屋が一番好いであらう。何處となく古風で、そして感じが好かつた。中澤君の畫の中にある石の手洗鉢——あそこの光線は靜かで、そしてやわらかであつた。そしてその手水鉢のところから、狭い階梯を上つて行くと、向うに六疊と四疊半の雛座敷があつて、その欄干から見ると、小さくはあるがちよつとした庭が見えた。一方は崖で綠葉が深く繁つてゐた。

道後についての批評は、何方かと言へば、あまり好い方ではなかつた。ある人は『猫の額のやうなところだ』と言つた。またある人は、『いやに陰氣だね。それに何にも見るものがないぢやないか。せめて、湯でも豊富にあればと思ふが、それもあまり多くはないんだからね』と言つた。

ある人は、『まア、松山があるから持つてゐるやうなもの、關東地方では、あんなところはいくらでもあるね』こんなことを言つた。しかし、私には何となくなつかしかつた。何もなかつたけれども——溪流の美も山の美も眺望の美も何もなかつたけれども、それでも何處か古いなつかしい感じがその町の隅々に巴渦を巻いてゐるやうな氣がした。光明皇后のことなどが思ひ出されて來た。

それに、河野氏の古城跡である公園が好かつた。設備としては新しいけれど、何處かに古い感じが残つてゐて、種々な人達のことを思はしめるに十分であつた。道後から電車で松山に行つて、そこで昔の城に登つて見るのも興味がある。

三十

高濱を出た汽船は、一直線に西南に向つて下る。右の方には、多くの島影が列なつて見えたり、帆が重り合つたり、周防の山とも思はれた山巒が時には黒く時には碧く見えてゐたりしたが、左は全く褐色の徒崖で塗られ、行つても行つてもそれが容易に盡きやうともしなかつた。

長き日を

いよの長濱

はるばると

わたりて來つる

いよの長濱

これは別府の方からやつて來て、そして詠んだ歌であつたが、實際、春の日などには、退屈し

つゝものんきな感じのするところであつた。しかし、くれなる丸は長濱には停船しなかつた。唯、眞直に別府へと向つて進んだ。

地図で見ると、あの長く海中に突出してゐる佐田の岬、それもこの汽船で行つてははつきりと思ふことが出来なかつた。しかもその汽船はその岬のすぐ下について航行して居るのであつた。

佐田岬を見るのには、何うしても別府細島間の汽船に乗らなければならなかつた。神戸を午後五時に出帆したくれなる丸が、いよいよ別府の灣内へと近寄つて行くのは、そのあくる日の午後四時過ぎであつた。次第に帆影が多く見えて來たと思ふと、一番先に、左に一抹の陸地を見た。それは矢張褐色をした徒崖であつた。

長い航海に倦んだ乗客は、別府が近いといふので、皆な甲板の上へと出て來てゐた。

『はゝア、あれか佐賀の關ですか？』

『ぢや、もうすぐですな』

『そら、向うに山が見えるでせう？ そら雲のかゝつた？ 高い？ あれか由布岳ですよ。あの

下に別府があるんですよ』

こんな言葉がそこからも此處からも起つた。誰の胸にも新しい土地に對する喜悅が滿ち溢れた。午後の日影は明るくあたりの海を照した。

少し経つと、今度は反對の方に小さな島があらはれて來た。

『あれは？』

『あれは姫島です。あそこには海底電信の局がある筈です』

『その向うは？』

『あれは國東半島です……。そら、もう見えて來たでせう。別府が……。？ 山の下のところにごたごたと人家が集つてゐるでせう？』

『あ、あれですか？』

『さうです……。あれが別府です？ あの一帶の地がすべて温泉で滿されてゐるのです……。』

『濱脇は？』

『それはちよつと左になつてゐます……。そら山が見えるでせう？ 丸い山が、低いけれど獨立した山が——？』

『え、え』

『濱脇はあの山の右になつてゐます。あの山は四極山と言つて、大友の古戦場です。あのわきを大分に行く電車が通つて行つてゐます』

『ちや、大分は、もつと左になつてゐるわけですね？』

『さうです……すつと左です。此處からはまだ見えてゐない……』

舵機の廻轉する毎に、次第に人家も瓦葺も、全體の感じもはつきりして行つた。それはいかにもすぐれた風景だつた。美しい海だつた。鶴見山もはつきりと見えて來た。

鷗の群が何羽となく海の上を飛んでゐるやうになつた時には、最早温泉旅舎の二階三階もはつきりと手に取るやうに見え出して來てゐた。

始めて此地に上陸した旅客は、海岸通りの、埠頭近い旅舎に引懸らすに、眞直に日奈子なり、

米屋なりに行くのが好いであらう。一先づそこに腰を落つけて、それから何處へなりと行つて見るが好いであらう。

しかし初めての旅客には、汽船の甲板の上から見たのに比して、別府の町の汚く且つ不整頓なのに目が附くであらう？ 『別府、別府と言ふから、もつと町並などの揃つたところだと思つたのに、何んだ！』などといふ嘆聲も出るだらう。しかし、それは最初の感じだけで、段々の中には、成程好いところだ！ 好い温泉場だ！ といふやうになるに相違なかつた。

だから、別府に來て、別府にだけ落附いてゐてはつまらなかつた。濱脇にも行き、觀海寺にも行き、鐵輪にも行き、龜川にも行つて見なければ駄目であつた。湯は到るところから湧き出した。龜川の手前の川などは、全く温泉になつてゐるところなどもあつた。

賑かな點から言つたら、別府よりも、濱脇の方が賑かでもあり、温泉場らしくもあつたかも知れなかつた。そこには混雑と浴舎が連つてゐて、旅藝人なども多く集つて來てゐた。そこにある砂風呂にも一度は是非入つて見なければならなかつた。あまり心持の好いものとは思はれなかつ

たけれども——。

別府で一番上品な、都會人向きの温泉と言へば、矢張、観海寺あたりであらうと思はれた。それは別府からいくらもなかつた。せいぜい三十町ぐらゐるものだつた。そこは別府から比べると、位置がぐつと高くなつてゐるので、二階、三階の室々からは、一日に美しい海が見えて、何とも言はれない好景であつた。それに、設備もかなり完全に出来てゐた。

こゝかちつと地獄めぐりをするのも興味があつた。鐵輪温泉にも一夜泊つて見る方が好かつた。

それから、私はあまり詳しいことを知らないけれども、これから一里か二里、山の中に入つて行くと、面白いところが非常に澤山あるといふことであつた。それに、山から見た海の美しさは、到底、口や筆ではあらはすことが出来ないものであるといふことであつた。例の別府名物として販賣されてゐる竹細工——その材料の細い竹が山奥に一面に密生してゐて、毎年それを伐るのも、ちやんと日をきめて、村々の收得區域も争ひの起らぬやうにきめて、それから一齊に刈ると

いふ話であつた。長年別府にゐて、その案内記を書いたといふ人は話した。『別府はまた開かうと思へば、いくらでも開けますよ……。箱根、あそこなどよりも、もつと規模が大きいですからね？ 湯の方から言つても、山の方から言つても……。私、一度探險に出かけたことがありますけれども、鶴見山の奥の方にも、非常に湯の澤山出るところが御座いますよ。あそこなんか、開きさへすれば、箱根の強羅ぐらゐるものには、ぢきなつて了ふと思ひましたよ。何しろ、山の何處からでもあの海が一目に見えますからね。上にのほればのほるほど、眺望が大きくなつて來ますからね……。ですから、別府はいくらでもひらけますよ。何んなに立派な温泉郷になるかわかりませんよ。現に、年々夥たしく發展して行つてゐますからね。十年前と今では、丸で違つたところのやうになつてゐますからね』

成ほどそれに違ひなかつた。それが更に發展して、今では、その奥の山布院から湯坪などがひけた。であるから十分な設備さへ出來れば、九州から、中國から、四國から、上方から、更に遠く朝鮮滿洲から、上海香港から旅客を引き寄せることは決してさうむづかしいことではなかつ

た。避暑地としても、避寒地としても、この地に及ぶところはなかつた。

それに、この附近には、長く滞在する旅客をも倦ませないだけの遊覽地が澤山にあつた。先づ電車で大分市に行けた。そこには南苜蓿灣を前にした美しい松原などがあつた。史蹟では、秀吉の先鋒軍として一番先に此處に入つて来て、島津と戦つて戦死した長曾我部信親の古戦場とその墓とがあつた。大分から竹田を通つて熊本の方へ延びて行く汽車は、まだすっかり完成はしないけれども、これが通じた曉には、半日足らずで、阿蘇山にも、その阿蘇の麓に散在してゐる温泉にも遊びに行くことが出来た。

これと反対の方面では、日出に大きな蘇鐵のある寺があつたり、宇佐神宮がわづかに四五時間で往復が出来たり、もう少し遠く一日、もしくは二日を費せば、中津から耶馬溪の谷深く入つて行つて、新耶馬溪まで探り盡して、柿阪の山村あたりに静かに一夜泊つて歸つて來ることが出来た。英彦山あたりまで入つて行くのにも、さう大して面倒ではなかつた。

三十一

『さうだね、成ほど、さう言へば、九州の二大温泉地をつくる事が出来るね?』

『九州ばかりぢやないよ、日本でも立派なものになるよ』

『さうだな、規模が大きいからな』

『さうすれば、いくらでも、外國人を引くことが出来る。否、それ以上に海外で成功してゐる成金を引寄せることが出来る……。現に、今でも、夏になると、上海、香港、もつと南から、小濱あたりに外國人がドシドシ避暑にやつて來るんだからね——』

『さうだつてね?』

『だから、温泉岳地方は何うしても、別府と東西相對して、立派な温泉地を成すに違ひないと思ふね。何しろ、南から船で長崎に着いて、それから峠を一つ越せば、茂木から汽船がいつでも出

るんだからな……また汽車で行つてもわけはない。」

「便利だな……。それに、温泉岳の温泉が、近年、非常に發達したつて言ふぢやないか？」

「だから言ふのさ……。温泉岳の温泉は素敵だからな……。何しろ、あそこからは九州でも一番、海の眺めの美しいとこだからね。」

『本當だね』

『何しろ、まア、想像して見たまへ。暑い暑い南から来て、あの長崎の裏の小さな港から小濱へとやつて来る心持の好さを——。それや内地人では、さう大して好いとも涼しいとも思はないかも知れないけども、外國人であつて見給へ。何んなに愉快に感ずるか知れやしない。その靜かな涼しい碧い海をお伽話の中のシインのやうに思ふかも知れない……。また、丸で別天地の極樂に來たと思ふかも知れない……。實際、外國人の話だが、長崎から小濱に來ると、丸で生きかへつたやうな心持がするさうだからね——』

『さうだらうな……。あそこのは好いからな——』

『ちよつと九州の一角ではないやうな氣がするからね。第一、あそこからは九州の西海岸の粹をつくしてゐるやうなところだからな……。島原半島も向う側はあまり好くない、何うしても千々岩から口の津あたりまでが一番好いんだからな……。海も有明の海は色がわるいが、あそこはもう深いからね。實際、温泉のあの眺望の好い旅舎にゐては、熱帯の暑さなんか何處かに行つて了つたやうな氣がするに相違ない——』

『さういふつもりで、設備がしてあるにはあるんだらう？』

『それはさうだけでも、まだ十分ぢやないね……。年々盛にはなつて行くやうだけれども——』

『おかしなもんだな。位置といふものは？ あそこなんかでも、二十年前には、あんなに開けて立派になるとは思はなかつたんだが……。田舎の小さな温泉場だつたんだがな。武雄あたりよりも、もつと振はなかつたんだがな』

『それを思ふと、位置といふことは、大切なことだね？』

『本當だね』

『それに、あの小濱の旅舎のすぐ海に面してゐる形が面白いぢやないか。』

『さうだね？ 汽船が来て、すぐ前にとまるね……？ ちよつと繪のやうなところがあるね？』

『二階で見ると、すぐ下の方を舟を通つて行くからね』

『何しろ、温泉は好い。山としても立派だし、海としても、ちよつと他に類がないくらいだ……』

……あそこがもつと開けて、別府と一緒に、世界の温泉地となるやうな時がきつと来るよ。それは、今から僕が豫言して置いても好い……』

『その豫言はいつか中るね……』

『それは中るとも、きつと中る。或は別府よりも、もつとハイカラな、外國式のものになるから知れない。あの長崎の裏の港から、白いランチが隼のやうに飛ちがふ時代が来るかも知れない。さうなると、きつと、あの小濱と温泉との間にエレベーターが出来て、すぐ一呼吸に旅客を温泉に運ぶやうになるかも知れない……』

『さうなると面白いね……。誰か、金を出して、今からさういふ計畫をするものが出て来ない

かな……』

『ちよつとそこまで目先のきくものはありさうもないから……。鼻の先のことばかり考へてゐるやうな世の中だから……。出来て見て、はじめてびつくりするやうなもんさ。あは、』

『何うしてもさういふことになるね。あとから智慧が出て来るもんだからね……。さういふ形から言ふと、矢張別府の方が先きに開けて、それから段々、さういふ氣運が促進されて行くやうになるでせうね』

九州では温泉岳の周圍——そこが一番見物だ。幹線の汽車の中から、長崎へ行く汽車の中から、長崎の裏の茂木の港から、口の津から、天草の福岡港から、何處からでもその美しい温泉岳が見えた。そしてそれにはいつも海が添つてゐた。徒崖が添つてゐた。岬が添つてゐた。帆影が添つてゐた。

『それで、その温泉岳を見るには、一番何處が好う御座います？』

『さあ』

私は返答に困つた。

『有明の海ですかな？』

『さあ……。何處から見ても美しいのだから、ちよつときめて言ふわけには行かないけれども、

私の見た中では、三角線の汽車の中など、殊に美しいと思ひました。」

『三角港からですか？』

『あそこからも見えるけれども、もつとこつちで、宇土から岐れて、すつと海岸に添つて行く
と、丁度それが夕方で、その温泉岳のかけに日が落ちて行つた。そしてそのあとの雲の色彩の美
しかつたことと言つたら、何とも言はれませんでした——』

『さうでせうな、あそこから見たら好いでせうな』

今でもその雲の色彩は私の眼の前にあるやうな気がした。或は赤く、鼠色に、紫に、白に、褐
色に、言葉で言ひあらはさうとしても容易にあらはせない色彩が、もくもくと簇つたり消えたり、
高く颯つたりしてゐるさまは、全く他では容易に見られないものであつた。私はじつとそれを見
詰めた。自然といふものは、これほどまでに美しいものかと思つて、じつとそれに見入つたこと
を思ひ出した。と、急に、汽車は山の中に入つて行つた。今まで見えてゐた温泉岳の姿は掻き消
すやうに見えなくなつて了つた。しかし、山の姿は見えなくなつたけれども、その上に巻き廻つ

た赤い、白い、鼠色の雲の色彩ははつきりと見えてゐて、あそこが温泉ヶ岳だといふことは、
それと指さされた。際崎の停車場に行つた時は、最早全く夜であつた。

天草からも温泉はよく見えた。手に取るやうに見えた。ことに、口の津の港上を航行する汽船
の甲板の上から見たのは、私には忘れ兼ねた。富岡港の港外にある松林を前景にした眺めもまた
『温泉百景』のすぐれた一つであらねばならなかつた。

九州の旅では、この他に、阿蘇が好かつた。あそこは是非行つて見なければならなかつた。宮
地に行つて、阿蘇神社に参詣し、引戻して坊中から登山する。基盤としては、阿蘇は世界にもめ
づらしいほど大きい火山であるが、登るのは、わり合に骨が折れない。下駄ばきでものほつて行
かれる。黒い、白い、鼠色の烟を前にしながら、丸い山の路を一步々々のほつて行く感じは、ち
よつと他には得られないものであつた。

それにあの噴火坑の大きな感じは、たしかに日本的と言ふよりも世界的と言ふべきものであつ
た。そこまで登つて行つたものは、唯僅若として後に倒れるばかりであつた。急には言葉も出

ないほどの偉観であつた。内牧温泉から遠見亭に行つて見る。

一夜を戸下温泉に泊る。樓の下に水の音がして、いかにも静かに好いところである。九州にはたんとない山の中の温泉といふ氣がした。

この阿蘇は、前にも言つた通り、九州中央線の汽車が完成すれば、非常に大分別府方面から開けて来るであらうと思はれた。尠くともその方面から、阿蘇に遊びに来るものが非常に多くなるであらうと思はれた。

筑前肥前あたりにも、温泉の分布は二三あつた。大宰府に行く二日市の停車場のすぐわきにある武蔵温泉、あそこは平野の温泉として、春などはちよつと好かつた。旅舎の垣一重は菱島で、雲雀の聲が終日高く空に囀つてゐるのがきこえた。

武雄は湯の分量が少なかつた。それに、土地としてもわるく俗化してゐる。九州では、曾つては聞えた温泉であつたけれども、今は別府と小濱とにすつかり壓された形になつて了つた。

汽車からは少しく離れてゐる嫌ひがあるけれども、長崎街道をすつと押し詰めて、多良岳連峰

の峠にこれからかゝらうとするところに、嬉野温泉といふのがあつた。昔はこゝは長崎に行く往還の要衝に當つてゐたので、かなりに繁昌したところらしく、橋南翁の『西遊記』などにも、此處で静かに上手な三味線を聞いた話などが書いてあるが、そこに行つた人の話では、武雄などよりも、湯も多く、設備もかなりに出来てゐるので、わざわざ出かけて行つても、決して後悔するやうなことはないといふことであつた。今は軌道が出来てゐる。

熊本から南に行つては、八代の先に日奈久温泉があつた。これは海に添つた、いかにも南國らしい、蜜柑などの黄熟してゐる、田舎の人達のよく出かけて行く温泉であるが、さうかと言つてわざわざ出かけて行つて見るほどのものでもなかつた。唯、静かに旅のつかれでも醫さうとするには好いといふぐらゐなものだつた。今はしかしひらけた。設備もあつちの方が鹿児島本線になつたので、非常に立派になつた。

玖磨川の川舟、それは今は汽車に變つた。今では、あの急な流れを、萬山の中を凄しく落して来る流れを、汽車の窓から首を出しながら眺めて行くことが出来るやうになつた。しかし、矢張、

人吉からあの川舟を仕立て、四十八もあるといふ急瀬を下つて見なければ、本當のことはわからなかつた。せめて白石あたりまで下つて見ることを私は旅客に勧めたいと思ふ。

人吉の近所に、林温泉がある。非常に好いところである。

矢嶽トンネル、ルウブ式——そこらはいかにも山の中だつた。萬山の中だつた。雲は湧いては消え、消いては湧いた。遠く玖磨川の潺湲も手に取るばかり見えるやうな気がした。

汽車は大隅から薩摩の方へと入つて行つた。

三十三

やつと私達は下りて来た。

『まあ、好う御座んしたね？ 此處まで来て？』

『本當ですわね』

かう相手の男は溜息をついた。

『何しろ、案内者が案内者の役に立たないんですから、困りましたよ。案内者が先きに眞青になつて了ふんですもの』

『本當でしたわね』

そんなことを後で言はれてゐるとも知らず、案内者の男は、大きな包を負つて、先へさつさと歩いて行つた。

『本當に、一時は何うなるかと思ひましたね？ 一間先も見えなくなつて了つたんですもの？』
そして路がなくなつて了つたんですもの——』ちよつと間を置いて、『あれで、眞直に下りて行つて了へば、今時分は、噴火坑の眞中に落ちて了ふところでしたね？』

『まア、本當に、命拾ひをしたやうなもんですな。あの凄しい噴火坑の音はまだきこえるやうですな』

『あの時、休んだのが好かつた。休まなければ、何うなるかわからなかつた……。案内者なんて言つて、何にも知らないんだからな。無責任な奴さ……。奴について行けば、今時分は何うなつてゐたかわかりやしない』

私達はこんな風に話した。私達は今朝祓川からこの霧島へと上つて來たのであつた。途中、馬の背越でもえらい眼に逢つたが——下に千仞の谷を見て辛うじて石につかまつて上るやうなえらい目に逢つたが、更に高千穂の頂上から噴火坑の方へと下りて來るところで、深い深い一間先も見えないやうな霧に逢つて、一時は全く下りて來る見當を失つて了つたのであつた。またま、

まごすれば、凄しい噴火坑の中にのめり込んで了はなければならぬのであつた。それをやつとのことで、一度失つた路をさがし出して、そして辛うじて下りて來たのであつた。そこまで來ると、霧はすつかり晴れて、櫻島の碧い海がはつきりと手に取るやうに見えた。

『あ、櫻島だ——』

『好い景色ですな』

私達は思はずかうした言葉を取交した。

それからまた少くとも十二三町は下りた。ひた下りに下りた。漸く山と山と重り合つた谷のやうなところへと出て來た。疎らな灌木の林があつて、草の下には冷めたい水が流れてゐた。案内者はそこに荷物を下した。

『お山は何うもおつかねえ——？』

かう案内者はひとり語のやうに言つた。

『滅多に上つたことはねえんだな？』

『あるにはあつても、お山はあらたかだで、後生のわるいものがのほると、すぐあれるでな……この間も西洋人がのほつたら、好い天気だつたのに、急にあれ出して、三人死んだ』

私は同伴者と顔を見合した。『後生がわるかつたわけだね？ さうすると——』

『さうだな』

同伴者も笑つた。案内者は平氣ですましてゐた。

私達も冷めたい水を掬んで飲んだり、食ひ残しのむすびを出して食つたりした。私達はこれから榮の尾温泉へ行かうとしてゐるのであつた。

『もうぢきかね？』

かう私は訊いた。

『温泉までけえ？ そんなもんだんべい……。此處からは、もう一人でも行けるだかな……。おめいさまがた、此處で、許して呉れねえかな？』

『許してつて？』

『おら、温泉まで行つちや、歸りがおつくうになるで、此處でお暇していだがな……。いけねかな？』

私達は顔を見合せた。こゝで、この案内者に遁けられては、それこそ大變だつた。私は聲を高

くした。

『だつて、約束ぢやねえか？』

『約束は約束だが——俺ア、おつかなくなつたでな』

『馬鹿な』

『な、さうして呉るや』

『そんな馬鹿なことが出来るか……。約束だ』

押問答の揚句、やつと今夜の泊賃だけ餘計にやることにして、そのまゝそこから出かけた。草

原が草原に續いた。

それは林があつたり、丘があつたりするやうな面白い山路だつた。をりをり碧い碧い海が蜃氣

樓か何かのやうになつて見えたと思ふと、それがまたすぐ隠れて了つた。

山の裾のやうなところをぐるぐると廻るやうにして歩いて行つた。日はまともに上から照るの
で——蔭といふ蔭もないので、汗はだくだくと額から流れ落ちた。振返ると、今下りて来た霧島の
噴火坑から黄い烟の颯つてゐるのが歴々と手に取るやうに見えた。

水の音は微かにきこえて来た。樹立が多くなつて来た。次第に谷合のやうなところへと入つて
行つた。向うに二三軒人家が見え出して来た。

『あそこか？ 温泉は？』

『さうだ——』

かう案内者は點頭した。しかしその向うの人家まで行くのが容易でなかつた。私達は谷をもう
一度上つて、更に山の裾をぐるぐると一めぐり廻らなければならなかつた。

やがてそこに榮の尾温泉が来た。静かな、静かな、いかにも山の中に埋れ盡したやうな温泉場
が——。

三十四

この霧島の裾には、この他に蓮太郎温泉などといふのがあつた。それから幹線の鐵路に添つて、
嘉例川の近所に、日當山温泉といふのがあつた。これは西郷隆盛が獵の歸りなどによく泊つたと
ころださうだが、全く川舎の温泉場で、水車が廻つてゐたり、柴垣が取廻してあつたりした。旅
舎と言つても、普通の民家のやうな宿が多かつた。

これから海岸に向つて下る。例の國分には、この地方の古社鹿兒島神宮がある。その向うはす
ぐ海で、一路が遙かに都の城の方に向つて、海岸を縫つて、徒崖につゞいてゐるのが見わたされ
る。昔は此處から鹿兒島に向つて船が出た。『西遊記』を見ると、その船中で、喧嘩が始つて、劍
を抜いた旅客があつたことなどが記されてあつた。しかし今は汽車のレイルがその丸く深く入込
んだ海岸に添つて走つて、加治木から重富の方へと行つた。そこらあたりはことに風景の好いの

できこえたところで、櫻島はすぐ眼の前に、碧い海には帆が大きなスワンか何ぞのやうに浮んで、車窓から眼を離すことが出来ないくらゐであつた。やがて櫻島が右から左へと移つて行つた頃、鹿兒島市の萬葉は盛氣樓か何ぞのやうに美しく見え出して来た。

鹿兒島から南には、鰻池火山群が起伏してゐるために、温泉は各所に湧出して、立派な一箇の温泉郷を成してゐるのであつた。鹿兒島に一日二日滞在して、城山のあとでも見て、それから汽船で、そつちへと行くことにする。この汽船の甲板の上は、ちよつと景色が好い。櫻島がいかにも美しい。また、大隅の海岸線の長く佐多岬の方まで連つてゐる形もわるくはなかつた。小さな島なども二三あつた。で、指宿に行つて汽船を下りる。そこは到るところ温泉地で、再び別府に來たかといふやうな気がした。

旅舎などにも大きなものが多かつた。それに、温泉の量も多く、何處の旅舎にも内湯のないものはなかつた。唯、いかにしても田舎で、風俗も違ひ、言葉もわからず、到底長くるる氣にはなれないやうな温泉であつた。

汽船は山川港まで行く。そこにも立派な温泉がある。ある講家の話では、その薩南地方には非常に見るところが多いといふことであつた。その人は話した。『さうですね。細かに見たら、一月ぐらゐ歸つて來られませぬね……。え、ありますとも、描くやうなところが——？ 温泉だつて、指宿、山川、すべて特色に富んでゐますよ。それは綺麗といふわけには行かない。都會人などには、ちよつと怪るやうなところもある。しかし、古風な好いところがありますね。何處か普通の感じと違つたところがありますよ。それに、あそこには風景の好いところがありますからね。第一、あの開聞、あの開聞ヶ岳が何とも言はれませぬね。山川からその裾を通つて、池田湖の傍に出て、そして眞直に海岸を枕崎あたりまで行つて見ると、かつたすぐれた勝景を何故人が放つて置くかと思はれるくらゐですね。池田湖に映つた開聞も見事です』

『坊の津の方まで行きましたか？』

『え、行きました。あそこいらも面白いですね。薩摩からは、海外に行くには、皆なあそこから出て行つたと言ふが、いかにもさうした外國に向つた港らしい気分がありますよ。平戸とか、

長崎とか、または博多とか言つたやうな気分が……。僕はあれからずっと北の方へ出て行きましたが、その時は、車か、馬車か、徒歩か、その三つでしたけれども、今は汽車が出來ましたからね。鹿児島まで行つたものは、そつちに入つて行くのもわけはありませんよ……。」

三十五

『私の心を誘ふ温泉がまだ一つ残つてゐた。』

『それは何處ですか？』

『中國の下の關から少し此方に來た山の中ですがね？』

『あんなところに温泉がありますかね……？』

『僕も丸で知らなかつたんですがね。『温泉めぐり』に書いて置かなかつたものだから、わざわざ知らせて來て呉れましたよ』

『何處ですか？ それは？』

『何でも、長府から入つて行くらしい。五六年前までは、軌道も何もなかつたので、全く地方的温泉として、普通には知られなかつたらしいんです。しかし非常の效能のある湯だ。靈湯だと』

言ふので、わざわざ遠いところを馬に乗つたり何かして、はるばる出かけて行つたものらしいんです——』

『長府からつていふと、北に入るんですな？』

『さうです？』

『成ほどさう言へば、あそこに軌道がわかれて行つてゐるやうだ……』

『つまり、中國山脈を横断して、裏日本の油谷灣の方へと出て行くところです』

『正明などといふ町のある？』

『さうです、さうです——あそこまで行かないんです。あの手前です……』

『さうですか、あんなところに温泉があるんですか？』

『あの街道から少し左の山の中に入つたところですよ。』

『つまり、中國山脈の中にある温泉ですね？』

『中國山脈と言つても、あそこいらに來ると、山はもう低いですからな。全く末梢ですからな。』

丘の中ですか、まア』

『それで、その軌道は何處まで行つてゐるんです？』

『丁度、その中國山脈の此方側のところまで行つてゐるんです……。だから、そこから峠にかかつて、峠と言つたつて、東北地方のやうなそんな高い峻しいものではありません。馬車も車もたしか通ふときいてゐます。この峠が一里半、それから左に川について入つて行つて一里半、つまり三里に少し遠いくらゐるでその温泉につくのです？』

『何ッていふんです？ その温泉は？』

『依山温泉——』

『湯は澤山あるんですか？』

『澤山あるらしいです。僕はまだ行つたことはないから知らないけども、旅舎なども大きいのが澤山あるやうです……。面白い温泉らしいですよ』

『へえ、それは是非行つて見たいですな……。それは、あの幹線の小月からわかる湯田温泉』

などよりは、餘程おもしろさうですね？」

『それは丸で違ふでせう。湯田は往還の途中にちよつとある温泉だし、それは草津とか、有馬とか、伊香保とか言ふやうに、温泉村を成してゐるんだから……中國の草津だなんて言ふものもあるさうですから……』

こんな會話を私はした。私にはいろいろなことが想像された。先づ一番先に長府附近のその山槽が眼に見えて、その中に、その翠微の中に、烟をあけて走つて行く小さな汽車が想像された。つゞいてその軌道の終端驛——さびしい、新開の、そこに、馬車だの、車だのの客を待つてゐる小さな終端驛が想像された。そこらに行くと、最早、中國山脈は近く近くその翠微を落して來てゐるだらう。嵐氣も饒くなつてゐるだらう？ 溪流もその美しい潺湲を見せてゐるだらう。雲もすぐその足元から湧き上るだらう。で、車なり徒歩なりで、その一里半の峠を越すとす。末梢にはなつてゐるとは言へ、兎に角日本の本州島の脊梁山脈である。そこにはいろいろな世離れたためづらしい感じを持った谷や峠や山槽があるであらう。春ならば鶯は啼くであらう。蕨が萌

えるであらう。秋ならば樹々の紅葉が美しく谷といふ谷を蔽ふだらう。小鳥が鈴のやうな聲を立ててゝ鳴くだらう。かう思ふと、私はすぐにも出かけて行つて見たいやうな氣がした。

そればかりではなかつた。そこには大内義隆の弑された古蹟がある筈であつた。またそれに縁故を持った大きな寺がある筈であつた。否、その他にも、温泉の分布が二三あつて、一週間や十日ぐらゐる滞在しても、倦むやうなことはないらしかつた。私の眼には、谷に架し溪に臨んだ温泉の村の参差として連つてゐるのがはつきりと映つて見えて來た。

熊岳城驛に着いた時には、まだ夜は明けてはるなかつた。私達は半は寢惚けたやうな心持で、うつとりとして、停車場を出てレエルを向へと越した。

何とも言へない。暁の快さがあたりに満ちた。内地などではとても感ずることの出来ないやうな爽やかな原始的な氣分で、心も體もその中に溶けて行くやうにすら私達には思はれた。不意にB君が言つた。

「好い匂ひですね？」

「何の匂ひだらう？」

「さうだね……あ、わかつた。アカシアの花だよ」

これはM君だ。

「さうかな？ 何とも言はれないな。何とか君、ロシアのステップの中にでも來たやうな氣がするぢやないか。」

「本當ですね。ツルゲネフの作品にでもありさうなシインですね。」

B君は早稲田の文科出身者らしく、かう私の言葉に合はせた。

アカシアと榆と楊とは交り合つて、葉がしたりと垂れて、しんとなつてゐた。野も山も茫と朝霧に包まれて、全く落附いて熟睡してでもゐるかのやうに見えた。風といふ風もなかつた。

「満洲もかうなると好いな」

「何しろ、今が一番好い時ですからな」

「もう一月も経つと暑くなるね？」

「え、え、高梁が今ではまだ一二寸ぐらゐるですけども、もう一月も経つと、人の肩をかくすぐらゐになりますからな……。さうなると暑くつて堪りませんよ」

「さうでせうな」

いつか私達は温泉行の軌道の出るところへと行つてゐた。

心配したほどのことはなかつた。無蓋軌道車は既にそこに支度を整へて私達の行くのを待つてゐた。小さな車臺に驢馬が二頭結びつけられてあつた。私にM君とは大きな鞆を持つて乗つた。何にか頻りに言つてゐた支那人の御者がそこに乗つて鞭を鳴らすと、車臺はすぐ滑かにレエルを鞭り出した。レエルの兩傍には、アカシアと榆と楊とがその幹と葉とを交へてゐて、丁度トンネルか何ぞのやうになつてゐた。その中を軌道車は頻りに走つた。

『好いな』

『本當ですな、好い心持ですな』

『こんな好い朝は、滿洲でも滅多にありませんよ』

こんな話をしながら、私達は膝を合せてゐた。不思議な形をした歪子山が左に見え出して來た。『あの山には面白い傳説があるんですよ。』B君は始めた。『あの山は一名望小山といひましてね。

何でも力にした一人の息子が北京に學問に行つたまゝ歸つて來ないので、その母親があこの山の上

にのほつて、京の方を望んで、こがれ死に死んだといふんですよ。それで望小山と言うんださうですよ』

『へえ』

その山には朝の霧が流るゝやうにかゝつて行つてゐた。

『矢張、かういふところにも、さうした話があるんですかね？』

『何處でも同じですな』

温泉までは歩けばそれでも二十二三町あるのださうだけれども、軌道車で來れば十五分ぐらゐしかかゝらなかつた。私は温泉ホテルの屋根だのエランダだのをやがてその深い綠葉の中に見出した。

私は好い心地だつた。これだから旅は止められないとも思つた。幸ひに本社から電報が打つてあつたので、ホテルの主婦や女中も起きてゐて、すぐ私達を奥の十疊へと伴れて行つた。

『何ふです——湯に入つて來て、もう一度のつくり寝やうぢやありませんか？』

これはM君だ。

「さうですね」

「でも、まだ眠られますか？」

「昨夜、ろくに寝ないんですもの!!」

「ぢや、さうするさ」

私達はドヤドヤと廊下を通つて浴槽へと行つた。それは湯崗子に比べては、比較にはならないけれども、それでも、内地のあらゆる温泉に比して、この浴槽のすぐれてゐるのを私は見落さなかつた。アルカリ泉なので、泉質も透明で、頗る氣持が好かつた。それに、浴槽がいくつもあつて、各自に一つづつ、その副室を備へてゐるのなども氣持がよかつた。ヒステリーとか、神経衰弱とか、腺病質とかいふのに最もよくきくといふことであつた。

私は湯に浸りながら、「日露戦争の時には、川の中に湧き出してゐて小さな小屋掛をしてあつたのをお覚えてゐるが——」

「あゝ、それぢや、向うの方だ。川原には今でも蒸湯がありますから——」

「あ、さうですか、今でもありますか。それぢやあとで行つて見ませう？」

私達はその時、鐵道線路をつたつて来て川をわたらうとして、そしてそこにその温泉の流れてゐるのを見出したのであつた。「これは好い。上等だ！」かう言つてすぐ服をぬいでそこに身を浸したことを私は思ひ起した。

やがて私達は湯から上つた。室には床が延べてあつた。私達はその中にもぐり込んで暫く寝た。私達がそれから起きて朝飯をすませて、ホテルの下駄を借りて散歩に出たのは、もはや十一時に近いころであつた。私はアカシアの綠葉の中に漙酒な休茶屋のあるのを發見した。また大町君の書いたこの温泉の經營者の石碑のあるのを發見した。茶屋からは、路がだらだらと川原へ下りて行つた。

六月の日影はあつくキラキラと木蔭のない川原に照つて、その向ふにある蒸湯のところに行くのにすら、汗が額に滲んで來るのを感じた。周圍を取巻いた山には印象派の繪のやうな色彩が美

しくかゝやきわたつて見えた。

蒸湯の設備もかなりによく出来てゐるのを私は見た。「矢張り、日本人は日本人だけのことをするな……。コマメにいろいろなことをやるのは日本人だな。」こんなことを思ひながら、私はそこから出て来た。河原の石の中からは、湯がブクブクと湧き出してゐた。

この熊岳城附近には、他に見るべきものが澤山にあつた。農事試験場の分場は中でもことに見なければならぬものである。また、成家の梨園といふものがあつた。支那人のやつてゐる菓樹園で、そこも是非行つて見なければならぬものであつた。また熊岳城の海岸では、毎年五六月の頃、黄花魚が盛に獵れた。二週間に五六萬斤も獲れるといふことであつた。本社のT氏も「あれも見て置く方が好いな。兎に角、今が丁度好い時だよ。盛にやつてゐるよ。それに、さ、は、ら、も、獲れる——ね？」いかにも支那の漁市らしくつて好いよ」かう言つて勸めて呉れた。しかし私はたうとう行つて見なかつた。

私達はビールを飲んだり、湯に浸つたりして、そこに午後二時近くまでゐた。せめては二三日

も滞在したいと思つたけれども、それは旅程上他日を期さなければならなかつた。歸りに振り返ると、その北を劃つた青龍山一帯の山脈に夕立を思はせるやうな黒い雲のかゝつてゐるのを眼にした。

私はそこに満酒な小さな停車場を見出した、ついでアカシアの緑葉が深く路の兩側に茂つてゐるのを見出した。

かなり強い雨が降つてゐた。

一本の傘しか持つて来てないので、私とSとはそれに、Kは女中に入れて貰つて、そしててくてく雨の中を歩くことになつた。

『お春、旨いことをやつてゐるな』

Gはかねてよく知つてゐるのでかう言つて笑つた。

『何うして？』

お春は笑ひながら白い美しい顔を此方に見せた。

『何うしてもないもんだ!! Kさんと相合傘なんかお安くないぜ!!』

Kが曾てこのお春をモデルにして裸體を書いたことのあるのをSは知つてゐるのであつた。

『……………』

女が何か言はうとして言はずにゐると、Kが引取るやうにして、

『やけると見えるね』

『それはやけるよ……………』

『たんとやきたまへ。ねえ、春坊、私はそんなぢやないねえ』

『……………』

Sは話頭を變へて、

『今日は、お峰はゐるかえ？』

『お生憎さま——』

かう言つて今度はお春はキュッキュツ笑つた。

『何故、そんなに笑ふんだえ？』

『だつて可笑しいんですもの……』

『何故？』

Sは意味ありげに詰寄せるやうにした。

『こいつはけしからん。理由なしに笑ふつていふことはない。何うしたんだ』口では強いことを言つても、顔ではGはにこにこ笑つてゐる。

『うそよ、御安心なさい。お峰さんはあつすよ』

お春は袂で口を押へた。

『何にも知りもしないで勘違ひばかりしてゐるんだから……。やり切れやしない!!』

『まあ、好いちやないか。お峰さんがゐるとさ——』

Kは傍から言つた。お春はまたキュツキュツ笑つた。

雨は益々強く降り出した。アカシアの樹から落ちる雨滴はバラバラ大きく傘の上に着立をたてた。

並木の外は、雨の脚が銀のやうに光つてゐる。

『お上はゐるかね？』

またSがきいた。

『何うですか？』

『今日はいやに變ぢやないか？』

アカシアの樹の間を向ふに出ると、苔の芽の生えた小さな池があつて、その向うにエランダを
持つた大きな建物が現はれ出して来た。それが對翠閣であつた。

いくらか風が加つてゐるので、その池の縁をその建物まで行くのは大抵ではなかつた。その入
口のところに來て、重い扉をあけて入つた時には、SもKもトンビの濡れた袖を拂うやうにした。

『まア、まア、車をお迎へにあけるのでしたのに』

そこに出てゐた四十先きの背のすらりとした容色の好いお上は、かう言つて如才なく私達を迎
へた。Sの顔を見、『おめづらしいですねえ』

『つい此間来たばかりぢやないか？』

Sは笑つた。

そこに、女達が二人も三人も出て来た。満鐵でやつてゐて、その大頭が株主になつてゐるだけに、女達の好みも、温泉場の女中とは違つて、何方かと言へば、おとなし好みの小間遣と言つた風であつた。何でもKの話では、そのお上といふのがしつかりしてゐて、女中にもわるいやうには取扱つて居ずに、ひまの時には女として爲になるやうなことを言つたりきかせたりしてゐるといふことであつた。また然るべき人が内地からやつて来た時には、頼んで女達のためにいろいろなことをきかせて貰つたりするといふことであつた。『この正月にも十日ほど来てゐたんですけれど、さびしいもんだから、話しに来て呉れ、来て呉れと言つて爲方がないから、毎夜のやうに行つてやつたが、しつかりした家庭のやうですね。決して感じがわるくなかつたよ』Kはこんなことをも附加へて行つた。

私とKとが二階に来て了つても、Sは下で何か話してゐた。

『お峰ツていふのは、何んだえ？ 君？』

私はKに訊いた。

『そら背の高い、色の白い、あとから出て来たのがるたでせう。あれがお峰です』

『別品だね？ 一番美しいぢやないか。S君のものかね？』

『なアに、そんなことはありやしませんよ。戯談ですよ……』

『でも……』

『あんなことを言つてゐるんですよ』

そこにKとお峰とお春とが揃つてやつて来た。

それは静かな好い一室であつた。温泉場としては、内地ではとてもこれだけのものは何處にも求めることが出来なかつた。日本風の室ではあつたけれども、副室がついてゐて、半ばエランダのやうに椅子だの卓だのが並べてあるのも心持が好かつた。室に入つたところには、その室代から食事費を示したハイカラな廣告が四面の硝子の中に入れられてあるのを眼にした。

「Kさん！」

お春はかう言つて笑つた。

「何だえ？」

「だつて、すましてゐるんですもの！」袂で口を掩つて笑ひつゝけた。

「本當に、お春は、さつきから笑つてばかりゐるぢやないか。何うしたんだえ？」

「だつて、お峰さんがゐるて好かつたでせうと思つて——」

「何うしたの？」

お峰は自分の名が出たのでかう振返つて言つた。

「何でもないんだよ」

「あら、あんなことを言つて……。さつきね、あなたのことを頻りに氣にしていきてゐたのよ」

「さう——」

お峰も狐につまゝれたやうに皆なの顔を見た。

「お春はい、加減なことを言つてしやうがないや」Kはわざと高飛車に出て、「その内、好いことを素つば抜いてやるから構はない——ね、M君」

Sはにやにや笑つてゐた。

浴槽は二階からすつと入口の反對の方へ下りて行つたところにあつた。支那人のボウイが大きなホテルなどを持つて私達を迎へた。

今までに曾て見たことのない、箱根、鹽原、伊香保、何處に行つたつて、かうした設備の整つたところはないと思はれる立派な浴槽——ひとつひとつ割られてピンと鏡を下せば下せるやうになつてゐる浴槽がやがて私達の前にあらはれた。そこからは湯が滾々として流れ出してゐた。

それに、氣のきいてゐるのは、浴槽のすぐ傍が低い硝子窓になつてゐて、そこからダリアだのチュウリップだの美しく咲いてゐるのが蒔繪か何ぞのやうに透して見えてゐることであつた。つまり浴槽に添つて細長い瀟洒な庭が出来てゐるのであつた。

「この湯は矢張アルメリカかね？」

『さうです』

『では、矢張、熊岳城といくらも違つてゐないんだね』

『しかし、こゝのはラジウムが多く含まれてあるさうです』

『これは好き女の人とでも來るのに好いところだね？』

『賛成ですな』

Sも笑つた。

私達は正午頃に奉天を立つてやつて來たのであるが、忙しいKをも誘つて來たのは、出來るなら明日此處から千山に登らうとしてゐるからであつた。まだひとつ、今日是非出なければならぬ會があるのだけれども、Tさんと一緒に千山にのほるなどといふ機會は容易に得られないからと言つて、それでGもわざわざ私達について來たのであつた。『何うも雨がふるね。こんな雨にならうとは思はなかつたね。滿洲では、大抵は雨といふ心配はないんだがな』Gはこんなことを言つて、硝子窓に滴り落ちる雨滴の方に眼をやりながら言つた。

『明日はやむだらうと思ふがな』

Sも戸外を見た。

『雨でも、無理に行けば、行けないことはないがね？』

『さア』

『雨では、ちよつとむづかしいだらうな？ 何しろ滿洲の路で、雨と來ては、一步もたどれないからな』

『生憎だな』

湯から上つて、KとSとが下で女達と話してゐる間を私は窓際の籐椅子に身を横へてじつとしてゐた。あたりはしんとしてゐる。雨脚の白く繁く降つてゐるのが見えるが、雨滴の音ひとつきこえて來ない。人の話聲もない。温泉場に來たといふやうな気分はちよつともしてゐない。成ほどこれでは冬はさびしいだらう。客などひとりもないやうな日が幾日も續くだらう。さういふ時にやつて來れば女達にちやほやされるだらう。ふと私は此處にゐた女中が滿鐵の高級囑託であつ

たW氏にひつこ抜かれて行つた話を思ひ出した。(さうかな……。さういふこともあるのかな？
矢張り、年を老つても、その道に濃い人がゐるのかな……。)こんなことを思ひながら、若いその女
中の心持などを考へてゐるが、今度はN女史が満洲落ちをして、こゝでNといふ大連の紳士と戀
に落ちた時のことを思ひ起した。「曠野の戀」はそれを聞き囁つて半分以上想像で書いたものだが、
現在やつて来て見ると、シインとしての湯岡子なども感じが全く違つてゐて、これはもう一度書
き直さなければならぬと思つた。さつきその話をMに持ち出すと、「女史の話はこゝのお上がよ
く知つてゐますよ」と言つて笑つた。急に、その話がきゝたくなつて私は階下に下りた。
KもSも何處に行つたか、そこらにゐなかつた。球突窓を覗いて見ても、應接間を覗いて見て
も、何處にもその姿は見えなかつた。矢張り穴があると見える。鰻のやうにすつと入つて行つて了
ふとあと何もわからない穴があると見える。しかし、大騒をしてその穴をさがすでもないと思
つて、そこらをブラブラしてゐると、丁度好い鹽梅にお上がそこにやつて來た。捉えて、
「あなたはNのことを御存じですね？」

「Nさんつての、あの東京から來てゐらした？」
「さうです、さうです、此處に來て、Nさんと泊つた——」
「あ、存じてはをりますか？」お上は何ういふ風に話して好いかわからないといふやうな調子で、「存
じてはをりますけれど、別に深くは？」
「實はね、僕のところの小説なんか持つて來たりしてね。よく知つてゐるんですがね、Nさんと
あんな仲になつたのは、此處だつて言ふちやありませんか？」
「さうで御座いますか、御一緒にお出でたことは御座いますけれど、私どもはちつともそんなこ
とは存じませんで——？」
「何でもNは大連から來る、Nさんは奉天から來るつていふ風で、こゝで落合つたんだつてね？」
「さやうで御座いますか。ちつとも存じませんのですよ。鈍う御座いますからね。それに、あち
らさまなんかお若くはあるし、美しくもゐらつしやるし、それは本當にハイカラでゐらつしやい
ますから」お上はさう言つたが、多少の興味をも感じてゐるやうに、「それで今は？」

『今ぢや好い旦那さんが出来たよ。此の間その旦那さんと二人でフランスへ行つて来てね。歸つて来てからも、銀座のS堂の子供服主任になつたりしてね。中々やつてるよ』

『さうでいらつしやいますかね？』

『Nさんも満洲にはゐなくなつたさうだね？』

『え、あの方も、たうとう、あそこを弟さんにお譲りになつて？』

『今、何處に行つてゐるね？』

『アメリカに行つてゐらつしやるさうです？』

こんな話をしてゐるところに、Kがひよつくり顔を出した。

『何處に行つてゐるたんです？』

『ちよいとそこに——』明日のことを訊きに支配人の許に行つてゐたといふことであつた。兎に角、雨は降つては駄目だが、この雨は明日は晴れることにして、驛車を一臺頼んで置いて貰つたといふことであつた。『馬賊は大丈夫かね？』と私が訊くと、冬はあぶないが、今なら大丈夫だといふことであつた。

いふことであつた。こゝからは上石橋子まで四里、それから峠を越して無量觀まで一里半ぐらゐあるから、そこまで々も日がへりに行つて来るのは容易でないといふことであつた。何うしても朝は四時に此處を立つて行かなければならないといふ話であつた。

『生憎だな？ 雨で？』

Kはかう繰返した。

その中にSも何處からかその荒雨した顔をあらはした。で、その夜は賑やかにビールなどを飲んで笑ひ興じた。Kは國際聯盟などにも行つて来たことのある新らしい思想家で、いろいろ面白い觀察を私に話してきかした。ドイツの形勢などについても詳しく話した。

おそく湯から上つて来た時にも、雨は頻りに降つてゐた。『まあ、十中六七は駄目だな、仕方がない、その時はあきらめろさ。Tさんとかうして一緒に此處に泊つただけで満足するさ』Kはこんなことを言つて床に就いたが、果して翌日の朝四時頃になつて、『とても雨で、今日は千山は駄目なさうで御座いますから』かう女中は襖を細目にあけて言つた。

『さうか。雨か。がっかりだな』

Kは兩腕を長く床の外に伸ばしながら言った。

『驟車は来たには来たのか？』

Sはそれに引かへて床の上につき直つて、眼をこすりこすり訊いた。

『馬車は参りませんけれど、きゝにまゐりましたから、さう申して断つてやつたさうで御座います』

『さうか？ しゃうがねえやー』 Sはすぐ床の上に倒れて、夜着をかぶつた。『まあゆつくり寝るさ』 私も寝返りを打つてまたぐつすり寝入つて了つた。

三八

こゝの温泉は、對翠閣、玉泉館、清林館と三つにわかれて、設備が全く違つてゐる。清林館は概して自炊で電費制度である。こゝにゐれば、十日ゐても二十日ゐてもいくらもかゝらない。玉泉館は室代と食事とが別々になつてゐるが、六疊の一室が室代二圓、定食一圓五十錢くらゐで、至極簡易である。まあ、普通、玉泉館にとまるぐらゐるが一番安易で好いと思はなければならなかつた。

對翠閣は概して第一流的であるため、室代が八疊四圓十疊七圓、定食が二圓といふ規定である。それでも茶代といふものがないから、内地に比して、さう大した高いとは言はれない。

しかしこの湯岡子の附近は風景に富んでゐるとは何うしても言へなかつた。鞍山の駱駝のやうな姿がちよつとめすらしく、晴れた時は千山の巒岫に日影が漲りわたるのが、美しいが、その近

所は概して平凡な野で、赤ちやけた丘陵の他、人の目を楽しませるやうなものはない。止むを得ずに、會社ではそこに池を穿つたり樹を栽えたりして、大きな庭をそこにつくつてゐる。池には芦荻が新芽を出してゐる。アカシアの花が強く匂つてゐる。その下では、清林館の自炊客などがのんきに釣の綸を垂れてゐる。何のことはない、東京の釣堀のやうなものだが、それでも多少の逸興がないではなかつた。五拾錢で一日遊んで行かれる共楽館の設備も満洲らしくつて感じが好かつた。

それに、支那人を客にする大きな建物も見事なものであつた。成ほどこれだけのものを損得に拘らず拵へて置かねければならないといふのは大變なことだと私は思った。支那人は高い金をつかつて温泉に來てゐるやうなものはなく、たまさかによつて來ても、一日いぐらの安いお客がその多數を占めてゐるといふ光景であつた。一等室に入つた客は、張作霖の夫人や娘ぐらゐるもので、その他にはいつも大抵はがら空であつた。私は君にちこちを案内して貰つた。

三九

この他に滿洲では安東近くに五龍背の温泉がある。五龍山といふ山脈の後になつてゐるのである。これは停車場からわけはない。川をわたればすぐである。矢張、湯崗子と同じやうに池を掘つたり杜若を植ゑたりしてゐる。背後は低い丘で、疎な柏の林で劃られてゐる。矢張アルカリ泉である。浴槽は清潔ではあるが、熊岳城よりもつとわるい。

朝鮮にはもつといろいろな温泉があるのであらうが、私はねつから行つてゐない。唯、通りすがりに寄つて來たといふくらゐなものである。金剛山の温泉里にある温泉はあれはわかし湯であるさうであるけれども、何と言つてもあたりの山水が凡でないで、感じが非常に好かつたのを記憶してゐる。滿鐵のホテルには湯がないので、タオルを持つて、一二町歩いて、他の旅舎の湯を借りて入るのであつたけれども、それでも非常に温泉らしい感じがした。ちよつと輕井澤の温

泉にでも來てゐるやうな心持がした。この他には東萊温泉、これは釜山から電車も通つてゐて、下の關から連絡船でわたつて了ひさへすれば、すぐわけなく行けるやうな温泉場だが——朝鮮から内地に往つたり來たりするものがちよつと寄つて見るのに都合の好いところだが、割合にさう大してすぐれてゐるとは思へなかつた。内地で言つて見れば、越前の蘆原ぐらゐの温泉場で、あたりの風物もさう大して好いとは思へなかつた。それに、滿洲の温泉とは違つてわるく空氣が濁つてゐて、女中の感じなど卑しく下等だつた。つまりわるい方の温泉氣分の多いところである。私はその日慶州の佛國寺ホテルを立つて、汽車で蔚山に着き、そこから自動車で十一二里をそこに走らせ來たのであつたが、存外路も好く、金剛山の往復に嘗めたやうな苦しみにも逢はずに樂にやつて來たことを今でも思ひ出した。

しかしこの温泉は設備の如何に由つてもつとよくなるべき素質は持つてゐる。街道から入つて行くと、釜山から通してゐる電車の停留場があつて、その向うに二階建の家がごたごたとかたま

つてゐる。『はゝア、有名な東萊温泉と言ふのは、こんなところかね。朝鮮では屈指の温泉場だといふから、もつと賑かな、温泉氣分のするところかと思つたよ。かういふところかね』蓬萊館の玄關口まで自動車を乗入れて、大きな梯子を上つて、二階の外れの八疊の間に案内された時、裏の硝子戸を明け放してあたりを眺めながら、私はこんなことを言つたのを覚えてゐる。一緒に行つたM君も「本當ですな、存外平凡ですね。これはこゝよりも別の家の方が好かつたかも知れませんが、せんね、やゝ俗ちやありませんか、それに朝鮮人の家族なども來てゐますね」など、言つたことせ記憶してゐる。

階梯を下りると、湯殿は母屋とは別に立つてゐて、四角な庭下駄を突かけて、踏石づたひに向うに入つて行くやうになつてゐたが、とつときの三疊には、大きな鏡が置いてあつて、そこに朝鮮人らしい女が蒼白いほど白い美しい肌を見せて、それに向つて頻りに化粧をやつてゐるのを私は眼にした。鏡に映つた女の顔は際立つて美しかつた。

私達は浴槽へ入つて行つた。あたりの平凡なのに引きかへて量は非常に多く、玲瓏として透

き徹つてゐて、身を入れるにつれて湯はざぶざぶとあたりに漲り溢れた。

「素敵だね、君」

Mが向うを顔でしやくつた。

「本當だね」

「朝鮮人にもあゝいふのがあるんだね。非常だね」

「形が好かつたね、それに——」

「本當に……」Mはかう言つたが、笑つて、『僕等は少し何うかしてますね』

「變だね」

私も笑つて見せた。

實際長い間の旅、女なしの旅、野郎ばかりの旅、すさまじい蒙古風の連続、赤ちやけた色の山槽、人家があると思へば土壁の汚ない炕のある室。たまさかにホテルの柔かな寢臺の上に身を横へても、あいにくそれが二人寢のベットであつたりして、笑ひながら、嘆きながら、あこがれな

がら、はるばる五十日も旅して来たことを私達はくりかへした。

體を沈める度に湯はザアザア漲りあふれた。

20350

5350
9



昭和三年七月十五日發行

溫泉周遊

定價金三圓

著者

中田 澤山 弘花 袋光

發行者

東京市神田區今川小路一丁目四番地 福岡 益

印刷者

東京市牛込區早稻田區三六二番地 關根 慶寬

印刷所

東京市牛込區早稻田區三六二番地 金星堂印刷所

發行所

東京市神田區今川小路一丁目

金星堂

電話九段二四九七番
牛込區三三二八番

日光雜記

田山花袋氏序
小川貢氏著

奥日光が國立公園の候補地に擬せられて居ると言ふ事は非常に愉快な事である。私は時々ある湯元を中心としての奥日光を頭に浮べた。箕沼・菅沼ことに鬼怒川の峡谷は私の常に神往くを感じずにはゐられない處である。私はあの山の中にある川俣温泉を思ひ浮べた。世界にも稀有であると言ふ湯澤の噴泉塔を思ひ浮べた。あそこが開けたら日光は、更に非常に深い山と谷とを持つ事になるであらう。それに避暑地としても輕井澤や箱根や富士見や伊香保の比でなくなるだらう。この『日光雜記』には、その奥日光が、世界にも稀有な湯澤の噴泉塔が、鬼怒川の峡谷が、川俣温泉のことが、はつきり其儘描き出されて居る。近頃のやうに俗化された日光にも、猶さうした『奥日光』がある事を本書は示して居る。(田山花袋氏の序文の一節)

四六判上製函入・寫眞數葉入・定價壹圓廿錢・送料八錢

終

